

日本語母語話者と中国人中級日本語学習者の  
作文における接続表現の比較研究

2012年9月

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏名 范 海翔

## 凡例

1. 表やグラフにおける「日本語母語話者」を「母語話者」、「中国人中級日本語学習者」を「学習者」と表記することにする。
2. 図表・例文・訳文は、特別な断りがない限り、筆者(範)による作成である。
3. 二文字を下げ(数字)：例文の番号
4. ( )：中国語の日本語訳  
太郎送花子礼物。(太郎が花子にプレゼントを贈った)
5. ( )または【訳文 / 】：言語材料の出所  
① 今朝、東京都内に火事があった。(〇〇新聞)  
② 今天早上东京都内发生了一场火灾。  
(今朝、東京都内に火事があった。/〇〇新聞)
6. [ ]：例文に対する説明・注釈  
太郎が花子にお土産を[下線部は目的語]送った。
7. 例文の先頭に表記された「\*」は不適格な文を表す。
8. 例文の先頭に表記された「?」は不自然な文を表す。
9. 本文との区別が明白でない場合、長い例文・引用文の文字サイズを小さくすることがある。

## 目 次

凡例 .....	1
目 次 .....	2
1. 序 章 .....	7
1. 1 本研究の動機と問題の所在.....	7
1. 2 本研究の構成.....	8
第 2 章 先行研究の検討 .....	10
2. 1 本研究における接続表現の定義と範囲.....	10
2. 2 テクスト研究における接続表現.....	13
2. 2. 1 Halliday, M. A. K. and R. Hasan (1976) の結束性と接続 .....	14
2. 2. 2 国語文章論における接続表現 .....	16
2. 3 日本語教育における接続表現の研究.....	19
2. 4 本研究の位置づけ.....	21
第 3 章 日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用 .....	22
3. 1 はじめに.....	22
3. 2 先行研究.....	23
3. 2. 1 市川(1978)の「文の接続」と接続語句の種類 .....	23
3. 2. 2 接続表現の省略可能性.....	24
3. 2. 3 日本語学習者の接続表現に関する研究 .....	25
3. 3 調査データ.....	27
3. 4 結果.....	28
3. 5 接続表現別の使用状況と考察.....	31
3. 5. 1 論理的結合関係.....	31
3. 5. 2 多角的接続関係.....	35

3. 5. 3  拡充的合成関係.....	38
3. 6  中国人中級日本語学習者が接続表現を多用する要因 .....	41
3. 6. 1  原因 1——文脈展開の様式の特徴から生じる多用.....	42
3. 6. 2  原因 2——使ってはいけない場合にってしまう.....	44
3. 6. 3  原因 3——省略してもいい場合に省略しない.....	45
3. 7  まとめ.....	47
第 4 章  日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的文脈展開 の異同 .....	49
4. 1  はじめに.....	49
4. 2  先行研究.....	50
4. 3  接続表現.....	52
4. 4  文の接続関係.....	52
4. 5  接続表現の使用率.....	55
4. 6  接続表現が用いられない部分の接続関係の認定.....	56
4. 7  考察.....	58
4. 8  まとめ.....	63
第 5 章  日本語母語話者と中国人日本語学習者における接続表現の省略に関する 対照研究 .....	66
5. 1  はじめに.....	66
5. 2  先行研究.....	67
5. 3  調査概要.....	71
5. 4  調査結果.....	72
5. 3. 1 【調査 A】 .....	72
5. 3. 2  【調査 B】 .....	76
5. 3  考察.....	78
5. 4  まとめ.....	82

第6章 中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴と日本語作文 に与える中国語干渉について .....	84
6.1 はじめに .....	84
6.2 日本語の接続表現の定義と類型 .....	85
6.2.1 定義と範囲 .....	86
6.2.2 類型 .....	86
6.3 連詞の定義・類型 .....	87
6.3.1 定義と範囲 .....	87
6.3.2 類型 .....	88
6.4 中国語作文における「連詞」の調査結果と考察 .....	91
6.4.1 結果 .....	91
6.4.2 考察 .....	92
6.5 日本語接続表現の類型基準による中国語「連詞」の分類 .....	94
6.5.1 分類結果 .....	94
6.5.2 考察 .....	96
6.6 まとめ .....	98
7. 終章 .....	101
7.1 まとめ .....	101
7.2 残された課題 .....	106
参考文献 .....	107
謝辞 .....	117

## 表の目次

表 1.	接続表現一覧	11
表 2.	市川(1978)の接続語句の種類	24
表 3.	調査概況	29
表 4.	接続表現の種類別使用数	29
表 5.	順接型と逆接型の使用状況	33
表 6.	添加型・対比型・転換型の使用状況	36
表 7.	同列型と補足型の接続表現の使用状況	39
表 8.	日本語母語話者による日本語接続表現の省略率(%)	45
表 9.	市川(1978)の「文の接続関係」	53
表 10.	接続表現の使用状況	55
表 11.	文接続関係の合計数と割合	57
表 12.	日本語母語話者と中国人日本語学習者の割合率の差	58
表 13.	日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における順接型の分布(一部分だけのサンプル)	59
表 14.	各接続関係の $t$ 検定結果	60
表 15.	【調査 A】 連文における接続の省略	73
表 16.	接続表現別の省略率に関する集計	75
表 17.	【調査 B】 段落における接続表現の省略	77
表 18.	接続表現別の省略率における集計	78
表 19.	母語話者と学習者の調査 A, B における省略率の差	79
表 20.	【調査 A】 に対して母語話者と学習者の省略率の差	81
表 21.	【調査 B】 に対して母語話者と学習者の省略率の差	81
表 22.	市川(1978)の文の接続型の 8 類型	86
表 23.	中国語の文の接続型 9 類型	88

表 24.	「連詞」の使用率の内訳(「連詞の種類別順」).....	92
表 25.	日本語の種類法による中国語「連詞」の分類と使用数.....	94
表 26.	日本語接続表現の種類法による「連詞」の使用数.....	96

# 1. 序 章

## 1. 1 本研究の動機と問題の所在

本研究は、文法的にも意味的に大きな間違いがないにもかかわらず、中国人日本語学習者の作文が分かりにくく、文脈展開に違和感が感じられるのはなぜかという疑問に端を発している。従来の研究は、日本語教育の観点から、日本語母語話者と異なる日本語学習者の文章論理を「不自然さ」とよび、その原因を日本語の習熟度の問題に還元し、如何に日本語を上達させ、日本語母語話者に近づけさせるかを目的とするものが多かった。しかし日本語学習者によって書かれた文章の分かりにくさと違和感は、単に日本語の習熟度による不自然さによるものだけではなく、接続表現の使用、論理の展開方法が日本語母語話者と異なっていることとも大きな関連性がある。本研究は、接続表現の使用に焦点を当て、日本語母語話者が書いた作文と比較して、日本語学習者における文章の接続表現の使い方を考察することにより日本語学習者の分かりにくく、違和感があるとされる文章の論理展開の特徴を明らかにすることが目的である。

接続表現に焦点を当てる理由は接続表現が文章の論理構造を支える機能を持つからである。市川(1978:88)では「文脈における思考方式を端的に示すものは、文と文をつなぐ接続語句<sup>1</sup>である。接続語句の使い方に注目すれば、筆者の思考のあとをたどることができる」と指摘されている。また、石黒(2008:14)は「読者に分かりやすく、印象に残るような文章を書きたい。その気持は、プロの作家であろうと、アマチュアのもの書きであろうと変わりません。でも、そのためには、どこから手をつけたらよいでしょうか。プロの作家<sup>2</sup>は、接続詞から考えます。接続詞が読者の理解や印象にとくに強い影響を及ぼすことを経験的に知っているからです」と述べている。本研究は市川(1978)、石黒(2008)と共

---

<sup>1</sup> 接続詞・接続助詞・接続句

<sup>2</sup> 井伏鱒二のこと、詳細は石黒(2008)を参照



通の立場に立ち、文章の論理構造を支えるのは接続表現だと考えている。

## 1. 2 本研究の構成

本研究は大きく分けると研究の動機と問題の所在を述べる序章、それに続けて、日本語母語話者と中国人中級日本語学習者の作文における接続表現の使用頻度、接続表現の種類、日本語母語話者と日本語学習者が書いた作文の文脈展開方式、接続表現の省略における相違点と共通点の分析、相違点と共通点を形成する要因の分析といった内容を論述する本論としての第3章から第6章まで、そして、本研究のまとめと今後の課題を述べる終章から構成されている。

本研究の枠組みは以下の通りである。

第1章は序章であり、本研究の研究動機と目的及び研究内容の構成について述べる。

第2章では、本研究における接続表現の定義と範囲について述べる。本研究に関係する先行研究についてまとめて述べる。

第3章では、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現を調査し、母語話者と学習者が接続表現を使用する頻度と、使われた接続表現の種類共通点を明らかにする。

第4章では、第3章で明らかにした学習者の接続表現の使用特徴に基づき、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的な文脈展開の相違点と共通点を考察する。

第5章では、第3章で明らかにした「学習者が母語話者より接続表現を多用する」という傾向の原因について、日本語学習者が接続表現を省略する場合の意識との関連性から探る。

第6章では日本語の接続表現と中国語の「連詞」を類型化し比較する。日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用特徴と日本語作文に与える中国語干渉について考察する。

終章では、本研究のまとめと、残された課題について述べる。

本研究の分析資料は国立国語研究所編『日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベースver. 2』と日本語学習者を対象にするアンケート調査結果を利用している。分析資料の詳細はそれぞれ詳しく分析を行う本論で述べる。

## 第2章 先行研究の検討

第2章では、先行研究の検討を通じて、本研究における接続表現の定義と範囲について述べ、研究課題の所在をより明らかにする。接続表現は文と文をつなぐものであり、従来の文論の見地から考察するだけでは接続表現の本質を明らかにすることができないと考えられるため、本研究はテキスト言語学や国語文章論の観点を踏まえ、接続表現を考察する。先行研究として、まずテキスト言語学や国語文章論の理論及びこれらの理論を踏まえ、接続表現に関する諸研究成果をまとめて述べる。さらに本研究は日本語教育の作文構成指導と関わりを持つため、作文指導の先行研究も取り上げる。先行研究について述べたうえで、最後に本研究の位置付けについて述べる。

### 2.1 本研究における接続表現の定義と範囲

文と文を接続する「つなぎ言葉」について接続表現・接続語句<sup>3</sup>・接続詞・接続語<sup>4</sup>・接続助詞・接続成分(この名称は藤田1990のもの)などの用語があるが、本研究は文を超える文と文のつなぎを担う「つなぎ言葉」を考察するもので、佐久間(1990、1992)の接続表現という名称を用いることにする。佐久間(1992:9)では「接続表現とは、文章論における「接続語句」に当たるものであるが、品詞論における接続詞・接続助詞や構文論における接続語・接続句」に対する用語であって、その取り扱う範囲のやや広いものである。文字資料のみならず、音声資料における「つなぎ言葉」一般を対象として考えると、いわゆる「接続語句」と比べても、さらに範囲が広い、接続詞に類似する働きを持つ副詞的表現や名詞的表現、連語的表現、句・節・文レベルの表現形式までが含まれることになる。接続表現は接続詞・接続助詞のほか、接続詞に類似する働

<sup>3</sup> 接続語句は、「接続のことば」と呼ばれてもよいもので、関係する範囲が広い。接続詞・接続助詞およびこれらと同じような機能をもつ語句の総称である。市川(1973:58)

<sup>4</sup> 接続詞は、単語についての呼び名(品詞)の一つであるが、接続語は、主語・述語・修飾語などと並ぶ、文の成分(文節単位)の一つとしての呼び名である。

きを持つ副詞的表現や名詞的表現、連語的表現、句・節・文レベルの表現形式までが含まれることになることを明らかにした」と述べている。接続表現について仁田・益岡(2002:162)も佐久間(1992b)と同じような記述をしていて、「接続表現は、二つ(以上)の言語(単語・文節・句・節・文・連文・段等)の間に位置して、前後の意味内容を関係付け、より大きい意味のまとまりとして結びつける働きをする言語形式である。特に文や節よりも上位の言語単位をつなぐ接続詞・接続助詞・並立助詞とその表現を対象とする」と定義している。さらに石黒(2009:73)は接続表現を「いわゆる接続詞のことで、おもに文頭に立ち、先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現の総称である」と定義している。石黒(2009:73)は「接続詞は品詞論上の概念であり、隣接する品詞との境界線を引くのに厳密な議論を必要とする」とも述べている。さらに例証として「たとえば」、「とくに」、「さらに」が接続詞なのか副詞なのかということは、その判断が極めて難しいとしている。また接続詞という名称を用いると、「それにもかかわらず」や「換言すると」のような接続句が入るかどうかも議論の対象になりかねないと指摘している。このような接続表現の帰属に関する問題は本研究の日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現の実態を調査する際にも感じていた。そこで、本研究はより全面的に日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文の接続表現の使用状況を明らかにしようとするものであるため、佐久間(1990・1992a)、仁田・益岡(2002)、石黒(2009)などの研究を踏まえて、接続表現という名称を用いることにし、具体的な接続表現の判定については石黒(2009:74)の「常用接続表現一覧表」に示されている137種の接続表現を参考にした。

表 1. 接続表現一覧

あるいは	じゃなくて	それはさておき	というのは	逆に	その後
あと	すなわち	そんなふうに	というのも	具体的には	そのため
いかえると	すると	第一に	というより	結局	そのために

以上	そうしたら	第二に	とくに	けど	そのように
いずれにしても	そうして	第三に	ところが	けれども	それが
いずれにしる	そうしないと	第四に	ところで	こうして	それから
いってみれば	そうすると	だが	どちらにしても	ここで	それで
一方	そうそう	だから	とにかく	こと(殊)に	それでこそ
いな(否)	そうではなく	だからこそ	とはいうものの	このように	それでは
いわば	そこで	だからといって	とはいえ	こんなふうに	それでも
おまけに	そして	だけど	とりわけ	最後に	それとも
かえって	そのうえ	ただ	なお	最初に	それなので
かくして	そのかわり	ただし	なかでも	さて	それなのに
かわりに	そのくせ	だって	なぜかという	さもないと	それなら
換言すると	その結果	たとえば	なぜなら	さらに	それに
しかし	それにくわえて	だとすると	なにしろ	ようするに	でも
それにしても	と	他方	なにせ	というか	要は
しかも	それにたいして	ちなみに	にもかかわらず	ということで	よって
したがって	そればかりか	つ(次)いで	はじめに	ですけど	むしろ
ついでに	反対に	ていうか	または	では	もっとも
つぎに	反面	ですが	またまた	ゆえに	しかしなが ら
つづいて	ひとつめに	ですから	みつつめに	ふたつめに	まず

石黒(2009:74)

本研究は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現及びその接続表現の使用によって形成された文脈展開方式に焦点を当てるものである。文脈とはなにかについて、ここで永野(1986)の説を取り上げる。文脈の定義について永野(1986:68)は「文章は、第一文から第二文へ、さらに第三文へ、という連接の関係において、すじの展開をもつところに、その本質的性格があ

る。そして、そのような文と文との、順を追って成りたつ継起的な意味の展開が文脈である」と指摘している<sup>5</sup>。つまり、文章の文脈は文の配列によって形成され、文章の文脈を考察する際に、文内の節間のつながりではなく、文と文のつながりに注目すべきであるということである。本研究は永野(1986)と同じ見地から、文を超えるレベルで働くもののみを対象にし、接続助詞を除外して考えている。例えば、(1)aの「が」は「節」と「節」をつなぐのに対して、(1)bの「だが」は文と文を接続する接続詞である。(1)bのような文と文をつなぐ言語単位が本研究の研究対象である。また、(1)cのようなほぼ文法化された接続句なども本研究の研究対象としている。

(1)a. 松坂は右投げだが、岡島は左投げだ。

b. 松坂は右投げだ。だが、岡島は左投げだ。

(石黒 2008:25)

c. 自分の安否を心配している人にメッセージを伝えるには、自分の電話番号を入力した後に録音すれば、知人たちはその番号を入力することで再生できる。被災地内の人同士や被災地外から被災地内の人への連絡にも使える。連絡したい相手の電話番号を入力した後録音すれば、相手は自分の電話番号を入力後に再生することで、自分あてのメッセージをチェックできる。いずれにしても、被災地内の電話番号を入力し、それをキーとして録音、再生する仕組みになっている。

(『毎日新聞』2005年8月30日朝刊)

## 2. 2 テキスト研究における接続表現

ここでいう「テキスト」(text)、あるいは「談話」(discourse)とは、「文」(sentence)のさらなる上に立つ言語的単位(文章)を想定して、それに与えられ

---

<sup>5</sup> この点について、杉田(1994)も同じようなことをいっている。

た用語である。「テキスト」という用語がヨーロッパ系統の論文でよく用いられているのに対し、「談話」はアメリカの学者によって好んで用いられているようである。国語学では文章という用語で考えられてきたものが、これらにほぼ対応すると考えてよい(国立国語研究所編 1983 : 7)。

テキスト言語学では M. A. K. Halliday の体系機能文法の視点が本研究に関わっている。Halliday の文法体系には言語の意味体系を扱う機能部門として、観念構成的機能(ideational)、対人関係的機能(interpersonal)、テキスト形成的機能(textual)の 3 つがある。本研究は Halliday & Hasan(1976) および Halliday(1994)におけるテキスト形成的機能(textual)を参照し、本研究の理論的枠組の 1 つとしている。国語文章論の先行研究には時枝(1950)、永野(1972, 1986)、市川(1978)、佐久間(1983, 1992)、森田(1985, 1995)、野村(2000)等がある。

以下、テキスト言語学・国語文章論における接続表現に関する先行研究をそれぞれまとめて述べる。

## 2. 2. 1 Halliday, M. A. K. and R. Hasan(1976)の結束性と接続

文の連接ならびに文章構造の解明はテキスト言語学においても重要な研究内容の 1 つである。文接続に関しては、主に構造(structure)論的な見地と機能(function)論的観点があるが、テキストの首尾一貫性(coherence)を重視する構造論と比べ、機能論がテキストの形成における結束性(cohesion)の役割を重要視していると言われる。結束性について、庵(2007 : 10)は「結束性とはある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行・後続する文(連続)に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する。この場合、その文連鎖は「結束的(cohesive)」であり、そのテキストには「結束性(cohesion)」が存在する」と述べている。首尾一貫性と結束性の違いについて次の 2 例を考えてみよう。

(2)a : 太郎は朝 6 時に起きたよ。

b : 釣りにいったのかい？ (庵 2007 : 9)

(3)a : 太郎は朝 6 時に起きたよ。

b : 雨が降らなきやいいけど、 (庵 2007 : 9)

(2)b の場合は、「行く」という動詞が取る必須項の中「が」格名詞句が表層に現れておらず、しかもそれが 1・2 人称の指示対象を取るわけでもないの、そこには解釈上の依存関係が存在するのに対し、(3)b は表層上に完全文であり、(2)b に見られるような解釈上の依存関係は存在しない。従って、(3)a-b がテキストであると解釈されるのは結束性によるものではなく共有知識によると考えられる。すなわち、(2)(3)ともにテキスト性を有しているが、(2)a-b は結束性の例であり、(3)a-b は首尾一貫性の例である。

以上の例から分かるように、結束性とは言語形式自体がテキストの中で微視的な文と文とのつながりを、目に見える形で表現している場合を指す。これに対して、首尾一貫性は話し手と聞き手、書き手と読み手の間で前提となる知識や話し手の意図、聞き手の類推を考慮に入れて理解していくのに必要な解釈上の一貫性を指す。Halliday & Hasan(1976)はこのような結束的つながりには「指示」、「代用」、「省略」、「接続」、および「語彙的結束性」の 5 種があると指摘している。本研究に關係する「接続」(conjunction)に関して、ハリディ&ハッサン(1997 : 293)は「接続は、ほかの結束関係とはかなり性質が異なっている。すなわち、一方では指示とも、他方では代用や省略とも異なっている。接続は、単に逆行照応関係にとどまらないのである。接続の要素は、それ自体結束的なのではなく、間接的、その要素が特定の意味を持っているために結束的なのである。接続の要素は元来、先行する(あるいは後続する)テキストの中へ延びていく手段ではなく、談話の中のほかの成分が存在することを前提とした、ある種の意味を表すのである」と述べている。接続が他の結束装置とは異なるものとされている点に注意すべきである。接続は単に先行の文の一部とつながるというものではなく、接続自体の持つ「意味」によって結束だとされている。



つまり、言表事態どうしをある種の論理的意味で結びつけるものなのである。

## 2. 2. 2 国語文章論における接続表現

国語学で最初に正面から文法論的文章論を提唱したのは時枝(1950)である。当時の国語学者の間では、文法論の範疇は「文」の研究であるという考え方が当然のこととされていた。橋本(1948:5)は「人々が言語によって自己の思想を伝達する場合には、いつも之を文の形として用いるのであって、1つの文だけで目的を達しない場合にも、文を幾つも重ねるだけで、文以外のものを用いるのでないから、文は文法の取り扱う言語単位の最も大きな物であり、これを分解すれば、さらに小さい言語単位が見出されるのである」と述べている。一方、時枝(1950:24-25)によれば言語学は「言語に於ける単位である語、文、文章を対象として、その性質、構造、体系を研究し、その間に存する法則を明らかにする学問」で、特に文章論に関しては「文章の構造或は文章の法則は、語や文の研究から帰納し得るものでなく、文章を一つの言語的単位として、これを正面の対象に据えることから始めなければならないのである。」(同書:23)と述べ、文章を一つの独立した言語的単位として取り扱う必要があることを鮮明に指摘している。

接続詞<sup>6</sup>に関しては、時枝(1950:161-178)は「文章の構造的特質である思考展開の表現において最も重要な役割を果たすのは接続詞と代名詞<sup>7</sup>であり、接続詞が文章展開の重要な標識であるのは接続詞が「辞」に属し、「話手の思考の展開の直接表現」であるからであり、詞より文章との関連で重要な意義を持つこと、接続詞の多くは「それから」、「そして」のように起源的に「代名詞」との複合であり接続詞と代名詞と2つの品詞が相俟って文章展開に重要な役割をもつこと」を指摘している。

時枝(1950、1954)が国語文章論を提唱した後、森田(1958)、市川(1973、1975)、

<sup>6</sup> 時枝の「接続詞」は単純な品詞上の「接続詞」ではなく、市川(1978)の接続語句、佐久間(1992a)、(1992b)の接続表現と同義の概念である。ただし範囲がそんなに広くない。

<sup>7</sup> 指示語と人称代名詞のこと

林(1973)、池上(1982)、永野(1986)、佐久間(2000)等日本語文章に関する研究が数多く発表され、その中でとりわけ市川(1978)、永野(1986)が最も時枝(1950・1954)の影響を受け、日本語文章の「つながり」、「まとまり」を形成する仕組みを明らかにするとともに、接続表現の本質を論じている。市川(1978)は、国語教育の実践に役立てるために文章論の実際に役立つと考えられる側面を重点的に体系づけた。そして「文をつなぐ形式」として接続語句を挙げ、文の接続関係の基本的類型として、「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「同列型」「補足型」「転換型」「連鎖」を挙げている。また、「順接型・逆接型」を「論理的結合関係」、「添加型・対比型・同列型」を「多角的連続関係」、「補足型・転換型・連鎖」を「拡充的合成関係」として、3種類にまとめることも考えられるとしている。永野の研究について、メイナード(1997)は次のように述べている。

「永野(1972、1986)は、日本の学校教育の分野で文章を研究の対象とし、時枝(1950)の文章論を具体化する研究構想を練っていく。文章は単なる文の積み重ねにすぎないという安易な見方が多い文法教育で、文章には文とは異なった別個の統一原理とでもいうべきものが存在するようだという時枝の言葉に共鳴し続け、研究を展開していく。そして、文章それ自体を文法論の対象として正面から取り上げ、分析考察していくことの重要性を具体例をもって示し、それが本当の意味での文法論的文章論であるとした」(メイナード1997:54)。

永野(1986)の研究の柱には、接続論、連鎖論、統括論が設けられ、文章の接続、連鎖、統括という3つの側面から分析されている。接続論について、永野(1986)は、まず隣接する2つの文に見られる意味のつながりが、どのような言語標識によって表されているかを調べたうえ、それを指標として次第に文章全体の意味のつながりを把握し、文章構造を解明しようとしている。具体的には、接続表現をたよりに意味の接続関係を引き出している。そして、連鎖論については、接続した複数の文を鎖の輪と見立てて、文が連なることによって文章が成り立つとする見方をとり、連鎖には主語の連鎖、陳述部の連鎖、主要語句の連鎖の3種類があると指摘している。統括論は、接続論と連鎖論に加えて、文章内の特定の文が全体を統括すると考え、文章の統一を確かめる方法となっ

ている。

時枝(1950)、市川(1978)、永野(1986)等の国語文章論に関する研究は文と文のつながり形式及び如何なる文接続を通してまとまりのある文章を形成するかが研究の共通する課題になっている。文接続及び論理的まとまりがある文章の形成が接続表現と関係があると考え、連文論の見地から接続表現の使用を研究したものとしては、川端(1956)、塚原(1969)、加留部(1979)、西田(1986)、相原(1987)、佐久間(1983、1987、1992a、1992b、1996)、浜田(2000)等がある。これらの研究は文接続の立場から接続表現の分類、使用を論じている。ここで佐久間(1992a、1992b)の研究を紹介する。

佐久間(1992a)は、談話資料に見られる接続表現を対象として分析し、文脈展開機能に基づいて、接続表現<sup>8</sup>を「話を開始する機能」、「話を展開する機能」「話を終了する機能」の3種類に分類している。そして、「話を展開する機能」を、さらに「話を重ねる機能」、「話を進める機能」「話を深める機能」「話しをそらす機能」「話を戻す機能」「話をさえぎる機能」「話を促がす機能」「話を交える機能」「話をはさむ機能」「話をまとめる機能」といった10種類の下位分類があると指摘している。

佐久間(1992b)は接続表現の省略問題を考察したものであり、市川(1978)の接続表現の省略に関する調査と同じ調査を行い、同一の接続類型であっても省略率の高低がある(「添加型」「同列型」の省略が高く、「順接型」「転換型」「補足型」の省略率が中程度である)と指摘している。

また、接続表現の意味特性から日本語文章の文のつながりや文脈の展開方式を論じる研究は橋本(1967)、岡田(1975)、石神(1980)、佐久間(1990c)、藤田(1990)等があり、さらに接続表現の集合から個別に接続表現を取り出して個別に論じる研究は、楊・馬場(2000)、守屋(2000)、石黒(2001)、張麟声(2003)等がある。本研究はテキスト言語学や文章論の立場から日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現に焦点を当てて論じるもので、これらの

---

<sup>8</sup>佐久間(1983、1987)は接続詞や接続語句という用語を使用し、佐久間(1992a)からは接続表現という用語を使っている。

文章論及び連文と接続表現に関する先行研究は重要な理論枠になっている。

## 2. 3 日本語教育における接続表現の研究

日本語学習者の日本語能力ならびに日本語文章力を高めるために、テキスト言語学や文章論の視点から日本語学習者の作文に使用される接続表現に関する研究を行った例は少なくない。日本語学習者の日本語レベルによって大きく初・中・上級の3つのレベルに分けることができ、とりわけ中上級の日本語学習者にとって如何に論理的で分かりやすい文章を書くかが日本語の学習段階で乗り越えなくてはいけない難関であり、日本語学習者にこの乗り越えを可能にさせるため、接続表現の運用、文脈の展開、文章論の立場から接続表現に関する研究が多数発表されている。

徳田(1995)、財部(2001)は中国人日本語学習者の作文における接続表現の不適切運用を中心とする研究であり、徳田(1995)は接続詞・接続助詞に関する誤用を例文を通して示すとともに、練習法を提案している。徳田(1995)は、接続詞の「使われないもの」よりも「使われすぎていたもの」が目立ったとし、「ところが、それから、そして、そのうえ、それで」などの不適切な使用例、接続助詞「が」の前置き用法が拡大解釈されて逆接の接続詞にも応用された誤解例、指示語を含む接続詞を使わないで指示語をその文の主語や目的語にしてしまった方がよい例などを挙げている。「どの程度の話題の転換に「ところで」がふさわしいかを理解させる練習」「文脈指示の「それ」の入れ方について接続助詞や接続詞を入れることと関連づけて練習」などを提案している。そして、財部(2001)は初級・中上級を分けて、作文に使用された接続表現の実態や誤用を分析し、その問題点を指摘している。初級から中上級になるにしたがって、単文の羅列、接続表現の不適切な使用、接続表現選択の誤り、多用・パターンの使用、談話展開・構成に関する接続の問題、接続助詞等で一文を長く接続しすぎる傾向という推移で問題箇所が現れることを示している。そして、初級では文をまとめた内容を持つ文章に繋げる指導、中上級では文章の展開を意識させ展開を方向つ

づける運用力の育成の指導が必要であるとしている。

日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現の運用の対照研究は加藤(1984)、横林(1988)、鮫島(1995)、浅井(2003)などがある。加藤(1984)、横林(1988)は日本語学習者の作文に使用される接続表現の量と種類を考察した研究で、鮫島(1995)は初級・中級レベルの学習者の作文に用いられた接続詞を調査し、発達過程を数量的に分析している。鮫島(1995)は、「並列・累加・継起」の場合は初級では文連接数は多いが、接続詞の使用率は低く、逆に中級では文連接数は少ないが、接続詞の使用率が高いと指摘している。また、「因果・帰結」「逆接・対比」は初級・中級ともに一定した文連接数の割合を占めるが、「因果・帰結」の接続詞の割合も高くなっているのに対し、「逆接・対比」では学習が進むに従い、接続表現の使用率は低下し全接続詞に占める割合も低くなる。中級では同じ連接関係の接続詞との誤選択が目立ち、学習者間による差がある等も指摘されている。浅井(2003)は上級日本語学習者の論説的文章の特徴について日本語母語話者と比較しながら接続詞の使用の面から調査分析をおこない、日本語母語話者に比べ接続詞の使用数が多いこと、接続表現の使用頻度について早い段階で学習した接続詞の使用頻度が高いことを指摘している。

日本語学習者の文章の話題の繋がり方についての研究は、坂東(1997)が挙げられる。坂東(1997)は接続表現の使用等に注目して文脈展開が不自然な日本語学習者の小論文(8名分)と日本語母語話者の文章(2名分)を対象に分析を行った。日本語学習者の小論文については、文脈展開に不自然さを感じさせる箇所、文章構造・話題の繋がり方と関係、及び接続表現を分析し、「上位レベルの話題から下位レベルの話題に移行する箇所」「同位レベルの話題に移行する箇所」で文脈展開に問題が見られることを指摘し、前者については「接続機能を持つ表現の使用」「接続詞と文末形式との組み合わせの誤用」の例を挙げている。日本語母語話者の小論文については、章節番号、提題表現、疑問形式、及びそれらと接続表現の組み合わせ等、話題のレベルに応じた様々な展開の方法を用いているとしている。「上位レベルの話題から下位レベルへと話題を移行させる機能を担う語句或は文を用いる手法を採るか採らないか」「章或は節の冒頭に位置する前

置き或は提題表現が、その章或はその節の話題へと話題を繋ぐ機能を果たしているか否か」が文脈展開の自然さに大きく影響することがわかったとしている。

## 2. 4 本研究の位置づけ

以上、テクキスト言語学、国語文章論、日本語教育の3つの面から、先行研究を概観してきた。

テキスト言語学では接続表現が結束性の1種として、テキストのまとまりの有無に関っているものであり、接続表現がこのような特性を持つからこそ文章の論理性を解明するには重要な手がかりとして認識されている。一方、国語文章論の研究では接続表現については、ほぼテキスト言語学と同じような見解が示されている。接続表現は単に文と文をつなぐだけではなく、文と文の意味関係を付与することもでき、文接続・論理的文脈展開の決め手になっている。接続表現はこのような側面があるからこそ、文章研究の際に重要な考察指標になっている。日本語教育における接続表現に関する研究では、日本語学習者の接続表現の使用の不自然さがしばしば指摘されているが、それは誤用の指摘にとどまり、その背後にどのような要因があるかについてはまだ解明されていない。

本研究はテキスト言語学(ハリディ&ハッサン 1976 の結束性)や国語文章論(時枝 1950・市川 1978・永野 1986 等)における連文や文脈展開の研究における接続表現に関する研究成果を踏まえ、大量のデータ調査を通じて日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現の使用特徴を明らかにし、両者の接続表現の使用特徴の相違点と共通点を明らかにする。そして、文脈展開の違い、接続表現を省略する意識の違い、中国語の「連詞」と日本語の接続表現の関連性という三つの面から、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現使用の相違とその原因をさぐる。

### 第3章 日本語母語話者と中国人日本語学習者の 作文における接続表現の使用

第3章では、日本語母語話者と中国人日本語学習者のそれぞれの作文に使われる接続表現を調査し、両者の作文における接続表現の使用量、使用頻度、接続表現の選択などの特徴を把握し、日本語母語話者と中国人日本語学習者の文章における接続表現の共通点と相違点を明らかにする。

#### 3.1 はじめに

日本語学習者によって書かれた作文は、文が正しく書かれているし、文章全体の意味も通じるのだが、何となく違和感を感じることもある。その原因はいろいろあるが、その1つは文章における接続表現の使用にあると考えられる。接続表現は、文と文、文段と文段の接続機能を担うだけではなく、これらの言語単位間の論理関係を明示するためにも使われている。つまり、接続表現は、書き手が自分の表現したい内容を分かりやすく整理し、文の論理的関連性を読者に伝えるために使われるものである。接続表現は、このような精神的活動を反映する機能も持つため、その選択や使う頻度などが難しいという特徴を持っている。学習者の接続表現の使用の実態について、浅井(2002)は上級レベルの日本語学習者の作文に用いられる接続助詞や接続詞を中心に調査した。また浅井(2003)は同上級レベルの学習者の作文に用いられる接続詞について調査した。両調査で得た学習者の文章における接続節または接続詞の使用特徴に基づき、浅井(2002、2003)は学習者の接続表現の使用特徴によって形成された文章論理展開の問題点を明らかにした。しかし、もっとも指導が必要な中級レベルについては触れていないのである。日本語学習途上にある中級学習者は、上級学習者より、接続表現が過剰か過少に使われ、そのことが文章の論理展開に影響を及ぼす可能性があると考えられる。この章では文章論の視点から日本語母語話

者と比較しながら、中国人中級日本語学習者の文章における接続表現の使用の特徴を考察する。接続表現の使用における中国人中級日本語学習者と日本語母語話者の相違点と共通点を明らかにしたい。さらに相違の原因を探りたい。

### 3. 2 先行研究

本論に入る前に、まず本章の内容と深い関係がある接続表現の種類、省略、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の使用状況の調査等の先行研究についてその内容を整理しておこう。

#### 3. 2. 1 市川(1978)の「文の接続」と接続語句の種類

市川(1978)では、文の接続が主に接続語句と指示語の2つでなされ、文脈の展開に重要な役割を持っているとされている。市川(1978)の接続語句は、接続詞、接続詞的機能を持つ語句、接続助詞、接続助詞的機能を持つ語句のことで、文と文、または節と節のさまざまな論理関係を示すものである。文の接続には、接続表現以外に指示語や同一語句、文末表現なども用いられるが、接続表現が文章内部の論理関係を端的に表す文の接続であると指摘されている。市川(1978)は、文と文がどのような論理関係でつながれているかを「接続関係」とよび、8種に分類している。表2は市川の分類とそれぞれに含まれる接続表現を整理したものである。

さらに以上の種類の文脈形成上の特色に基づき、市川(1978:93)はこの8つの種類の接続語句を3つのグループにまとめて考察している。順接型・逆接型は2つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係を表すため、グループ1の「論理的結合関係」にまとめられている。そして添加型・対比型・転換型のような2つの事柄を別々に述べる関係はグループ2の「多角的連続関係」とよばれる。最後に1つの事柄に関して拡充して述べる同列型・補足型・連鎖型はグループ3の「拡充的合成関係」としてまとめられている。



表 2. 市川(1978)の接続語句の種類

順接型	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型 だから・ですから・それで・すると・かくて・こうして・それには 等
逆接型	前文の内容に反する内容を後文の述べ型 しかし・けれども・だが・でも・が・ところが・それが 等
添加型	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型 そして・ついで・それから・そのうえ・そのとき・そこへ 等
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型 いっぽう・逆に・それとも・または・あるいは 等
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型 ところで、さて、では、ともあれ、それはそうと 等
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型 すなわち・つまり・要するに・せめて・とりわけ 等
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に重ねて述べる型 なぜなら・というのは・だって・なお・ちなみに 等
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型(普通接続表現は用 いられない)

市川(1978:66)

### 3. 2. 2 接続表現の省略可能性

接続表現の省略について、市川(1978:71)は「文の接続関係は常に明示されるわけではなく、文と文の間に接続表現を入れなくてもよい場合がある」と指摘している。さらに、市川(1978:79)は「接続表現には省略できる補助的用法のものと必ず必要な必須的用法のものがあり、「また」、「そして」、「いっぽう」、「それとも」、「すなわち」などは補助的用法としての傾向が強く、「ところが」、「しか

し、「だから」などは必須的用法としての傾向が強い。接続表現を多く用いると文章が論理的に整えられるが、その反面、描写性が薄れて説明調になったり、簡潔さが失われたりする場合もある」と指摘している。また、佐久間(1992b:72)は「各接続類型の省略率の平均値を見ると、「逆接型」「転換型」が両データとも比較的 low、省略されにくい用法だと考えている。これに対して、「対比型」「同列型」「添加型」「補足型」の順で省略率が高くなっている」と指摘している。さらに馬場(2006)は、市川(1978)や佐久間(1992b)の研究を踏まえ、接続表現の省略に影響する文脈的要因を検討している。

### 3. 2. 3 日本語学習者の接続表現に関する研究

学習者の作文における接続表現に関する研究は数多く発表されている。しかも視点もさまざまである。接続表現の誤用を引き起こす諸要因の究明は佐藤(1992)、濱田(2000)などがある。浅井(2002)は、文の構造(接続助詞を中心)の視点から上級学習者の接続表現の使用特徴を調査している。文章論の立場から学習者の接続表現を研究するものとしては、浅井(2003)、田代(2007)がある。

浅井(2003)は市川(1978)の文の接続関係による接続表現の類型法に基づき、日本語母語話者と上級学習者の作文における接続表現を分類し、両者の作文における接続表現の特徴をまとめた。浅井(2003)の分析・考察の結果は、母語話者と学習者の間における接続表現の使用の相違と考えられる点がいくつかあることを示している。まず両者の接続表現の使用量については、学習者の接続表現の多用が目立っている。そして、接続表現別に見ると、「また」は母語話者、学習者ともに多く用いているが、「そして」、「つまり」は学習者の方が多く使用している。さらに、学習者では「そうすれば」、「そうしたら」などの条件— 帰結を示す接続表現と、「だから」、「けれども」、「でも」などの話し言葉が多く使用されている。最後に、学習者の作文では「だから」、「そして」、「しかし」などの比較的早い段階で学習する接続表現の使用頻度が高いという現象が見られることに対して、浅井(2003:95)は、「学習の早い段階で導入された項目は話し言葉、

書き言葉とも用いることができるため、学習者が使いやすいと考えられる。それに対し、母語話者の使用が多かった「さらに」、「だが」などの接続表現は使用範囲に制限があり、学習者にとって誤用しやすく、あまり用いられないと考えられる」と述べている。以上のように浅井(2003)は母語話者と上級日本語学習者の作文に見られる接続表現の特徴をまとめている。

田代(2007)は、論理展開に関わる接続節と接続詞に注目し、中級レベルの学習者と母語話者の作文を比較分析し、学習者の文章に使われる接続表現の量の特徴を考察した。文と文の接続を示す接続詞の使用量について、田代(2007)は接続詞使用量の平均については学習者のほうが母語話者より多く、*t*検定を行った結果に有意差が得られたと報告している。さらに田代(2007)は市川(1978)の類型法に基づいて、類型別に接続詞の使用を考察している。逆接型の接続詞の使用は、母語話者の場合もっとも使用頻度が高いのに対して、学習者の場合には3番目であった。順接型の接続詞の使用頻度は、学習者の場合1位であり、母語話者の場合は4番目であった。同列(「つまり」等)と補足(「なぜなら」等)の接続詞は学習者の方が母語話者より少ないことも見られた。以上の量的結果に基づき、田代(2007)は学習者が順接の接続詞や恒常的条件の条件節<sup>9</sup>を用いて根拠を示す場合が多く、順接的展開が中心で逆接的展開が少ないため、主張の制限、反駁などの論理展開が日本語母語話者ほど多くないことを明らかにしている。田代(2007:142)は「作文・文法指導への提言としては、意見を述べる際にその理由のみならず主張の反証、制限、例外への反駁・対策を加えるという展開も必要とされるため、それらの表現を文脈上で自在に運用できるようにすることが求められよう」と述べ、学習者と日本語母語話者の文と文をつなぐ型によって形成された論理展開の相違について整理している。

以上の日本語母語話者と中・上級の日本語学習者の作文における接続表現に

<sup>9</sup> 田代(2007:5)は「条件節のと・ば・たら・ならを中心とするそれぞれの形式には、多様な用法がある。そこで文の前件と後件の内容から用法を判断し、条件節をさらに分類することにした。(中略) 庵(2001)になら、仮定条件(典型的条件で、前件の真偽が不明な場合)、反事実的条件(前件は偽であることがわかっている)、確定条件(前件が真になることがわかっている)、恒常的条件(PのときはいつもQになる、PのときはQであることが多いという関係条件)、事実的条件(前件がすでに実現している)に分ける」と述べている。

関する研究は、市川(1978)の「文の接続」論を用いて、両者の接続表現を類型別に考察したものである。浅井(2003)、田代(2007)はともに、母語話者より学習者が接続表現を多く用いる現象を取り上げたが、その現象を引き起こす要因についての分析はまだ十分ではないと思われる。本章は、先行研究と同じように市川(1978)の「文の接続」理論を用い、中国人中級日本語学習者と日本語母語話者の作文における接続表現を類型別に考察し、さらに接続表現の省略可能性や文脈展開の様式と関連づけて、学習者による接続表現の多用の原因を検討したい。

### 3. 3 調査データ

本章では国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」<sup>10</sup>を利用する。同データベースより日本語母語話者及び中国人日本語学習者が書いた「喫煙についての規制」に関する日本語の作文、それぞれ 43 篇と 44 篇、合計 87 篇を取り上げ分析対象とした。日本人向け、学習者向けの「喫煙についての規制」は以下の通りである。

#### 日本人向け

以下の課題からひとつを選び、日本語で 800 字程度の作文を書いてください。日本の事情をよく知らない国外の人びとに読んでもらうつもりで書いてください。

喫煙を規制するかどうかには賛否両論があります。喫煙は百害あって一利ないものであるから、公共の場所ではたばこを吸えないよう法律で規制すべきだ、またたばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、テレビ等での放送も厳しく制限すべきだ、という意見がある一方、喫煙者に

---

<sup>10</sup>本研究の第 3、4、6 章が「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」を分析資料にし、重なる言及をさけるため、4、6 章に再び紹介しないことにする。

も喫煙の権利があるはずだから、規則で一律に禁止するのは不当である、という意見もあります。

この件に関するあなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立った上で、日本語で論じてください。

#### 学習者向け（原文はふり仮名つき）

次の文を読んで、自分の意見を 800 字くらいの日本語で書いてください（この作文は日本人の学生や大学の先生が読みます）。

今、日本でたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、バスや電車など公共の場所でたばこを吸えないよう規則を作るべきだ。また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ」。

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれにもたばこを吸う権利があるはずだ」。あなたはどのように思いますか。たばこについて、あなたの意見を書いてください。

### 3. 4 結果

今回の調査対象である 44 篇の日本語母語話者の作文は合計 715 文からなり、43 篇の中国人日本語学習者の作文は合計 790 文からなっている。接続表現の使用は、日本語母語話者は 176 個であり、日本語学習者は 225 個である。日本語母語話者と日本語学習者のそれぞれの作文における接続表現と総文数の割合を計算すると、日本語母語話者の接続表現は 24.6%を占めていて、中国人日本語学習者の場合は 28.4%であった。日本語母語話者より中国人日本語学習者のほうが接続表現の使用量が多いことが分かった。具体的データは表 3 を参照されたい。

表 3. 調査概況

対象	作文数	全文数	接続表現数	割合
母語話者	44	715	176	24.6%
学習者	43	790	225	28.4%

詳しく両者の接続表現の使用を分析するため、調査で得た接続表現は市川(1978)の類型方法に基づいて分類した。結果は表 4 を参照されたい。接続表現の使用の上位 3 位までは、日本語母語話者は添加型(28.4%)、逆接型(27.3%)、同列型(14.2%)の順であるのに対して、中国人日本語学習者は順接型(28.4%)、添加型(27.6%)、逆接型(21.3%)の順であった。一方、もっとも少なかった型は、日本語母語話者は転換型(2.3%)で、日本語学習者は転換型(1.3%)と補足型(1.3%)であった。連鎖型は接続表現を使用しない型であるため、今回は統計に含めなかった。

表 4. 接続表現の類型別使用数

類型	母語話者	学習者
順接型	24(13.6%)	64(28.4%)
逆接型	48(27.3%)	48(21.3%)
添加型	50(28.4%)	62(27.6%)
対比型	8(4.5%)	8(3.6%)
転換型	4(2.3%)	3(1.3%)
同列型	25(14.2%)	37(16.5%)
補足型	17(9.7%)	3(1.3%)
合計	176(100.0%)	225(100.0%)

次の(4)(5)(6)は日本語母語話者が多用する添加型・逆接型・同列型の接続表

現の使用例である。例(4)(5)(6)で用いられた「また」「しかし」「つまり」はそれぞれの類型においてもっとも多く用いられている接続表現である（下線は筆者による）。

(4) テレビ等の影響が必ずあるとは言い切れないけれど、喫煙の姿に、あこがれを持たせるのはテレビ等の情報メディアだろう。また、喫煙者の喫煙権利を主張する意見もあるが、喫煙は周囲の人にも影響を及ぼす。

（日本語母語話者 添加型）

(5) たばこを吸ってはいけないという権利を勝ちとっているのである。しかし、喫煙者にとっては喫煙の権利を奪われているのである。

（日本語母語話者 逆接型）

(6) どちらかの権利を主張すればもう一方は必ず権利を奪われるということを考えなければならない。つまり、非喫煙者の規制の主張は喫煙者の権利を奪いとっているのではないか。

（日本語母語話者 同列型）

次の(7)(8)(9)は中国人日本語学習者が多用する順接型・添加型・逆接型の使用例である。例(7)(8)(9)に出てきた「だから」「また」「しかし」は中国人日本語学習者のそれぞれの類型においてもっとも多く用いられている接続表現である。

(7) 世界で毎年喫煙で死んだ人が何百万人ぐらいいる。だから、現在、各国ではたばこが禁止する規則を作った。

（中国人日本語学習者 順接型）

(8) 始めて日本に来た時、日本人の喫煙者の数に驚かれた。また、日本人女性がたばこに対する平気さも不思議に思った。

（中国人日本語学習者 添加型）

(9) 確かに、誰にもたばこを吸う権利がある。しかし、公共の場所では、たばこを吸うと、まわりの人に迷惑をかけるから、やめるべきと思う。

（中国人日本語学習者 逆接型）

このように日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文の接続表現の基本概況と具体的用例について見た。総文数に対する接続表現の使用割合は日本語母語話者より中国人日本語学習のほうが少し多いのが分かった。また、日本語母語話者は添加型の接続表現を多く用いるのに対し、中国人日本語学習は順接型を多用している。そして転換型の接続表現の使用は両者とも少ない傾向が見られた。日本語母語話者と中国人日本語学習の接続表現の使用上の特徴ならびに要因について、次節で接続表現別に分析し考察を加える。

### 3. 5 接続表現別の使用状況と考察

接続表現による文脈形成上の機能に基づき、市川(1978:93)は、「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「転換型」「同列型」「補足型」「接続型」等 8 類<sup>11</sup>の接続表現を「論理的結合関係」、「多角的接続関係」、「拡充的合成関係」の 3 つのグループにまとめている。本章は市川(1978)の分類法に基づき、8 種の接続表現を 3 つのグループに分け、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の使用状況を詳しく考察しようとするものである。

#### 3. 5. 1 論理的結合関係

論理的結合関係には順接型と逆接型の接続表現がある。日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文に用いられる順接型と逆接型の接続表現に関する集計結果は表 4(29 頁)のようである。順接型の接続表現の使用は、日本語母語話者が 24 個(13.6%)であるのに対して、中国人日本語学習者はずっと多くの 64 個(28.4%)を用いている。逆接型は日本語母語話者が 48 個(27.3%)と中国人日本語学習者は 48 個(21.3%)である。日本語母語話者より中国人日本語学習者の方がやや高い。

---

<sup>11</sup> 連鎖型は接続表現不使用



文章中の逆接型の接続表現について、浜田(1995)では、「P しかし Q」はある事実の別の面を見せることによって、相手に反論したり、話題を転換したりするとされている。次の例(10)、(11)のように「しかし」を用いることにより、日本語母語話者は自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えたりして、議論を精緻に行い、自分の意見をより強くしている。また、「しかし」の使用を通して、自然に新しい話題に変えていくのである。

(10) 私はタバコ嫌いですから、規制には基本的に賛成です。しかし、ただ単に禁止一点貼りでは、その規制は功を奏すことはないでしょう。人に自由な決定を希求する本能が備わっている限り、それをくすぐる形での規制、とりもなおさず喫煙者の本心から出た自主的な規制でなければならぬのです。時間と論議と行使が必要でしょう。

(日本語母語話者 逆接型)

(11) シンガポールでは、道端にごみを捨てたら罰金が課せられると聞きます。私はこの事を知った時は、「とても良い制度だ。日本もこうすれば道はもっと綺麗になるのに…」と思いました。しかし今になってよく考えてみると、規制されなければ国民が道を汚さぬ努力をしないという事実は、とても悲しく残念なことに違いないのです。

(日本語母語話者 逆接型)

一方、中国人日本語学習者は順接型の接続表現を多く用いている。(12)は中国人日本語学習者の順接型の接続表現を使う例である。順接型の接続表現が2回出てきている。

(12) こう言えば、たばこの問題は別の時間・場合・人によって、違う解決方法があるべきだ。だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう。社会、あるいは、コマーシャルとか、周りの人とか、みんな手を出さないで積極的吸わせること、また、禁止すること、両方ともしない

べきだと思う。だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面に「これが体に悪い」だけと書いた方がいい。

(中国人日本語学習者 順接型)

### 3. 5. 1. 1 順接型接続表現の特徴

順接型接続表現の出現内訳を見ると(表5を参照されたい)、日本語母語話者は「だから」をもっとも多く用いている。次は「ですから」、「そのため」の順である。一方、中国人日本語学習者は日本語母語話者と同じように「だから」をもっとも多く使っている。その次も「ですから」である。順接型接続表現の選択において、日本語母語話者と中国人日本語学習者は同じく「だから」と「ですから」を多用する傾向があることが分かった。

表 5. 順接型と逆接型の使用状況

順接型	母語話者	学習者	逆接型	母語話者	学習者
だから	10(41.6%)	32(50.0%)	しかし	40(83.3%)	17(35.4%)
ですから	5(20.1%)	12(18.6%)	それなのに	3(6.25%)	—
そのため	4(16.7%)	—	でも	2(4.16%)	25(52.1%)
だからこそ	2(8.30%)	—	だからといって	2(4.16%)	—
それで	1(4.17%)	9(14.1%)	ところが	1(2.04%)	4(8.3%)
こうして	1(4.17%)	2(3.13%)	けれども	—	1(2.1%)
それゆえに	1(4.17%)	—	それにしても	—	1(2.1%)
したがって	—	3(4.69%)	合計	48	48
こうすると	—	1(15.6%)	「—」は使用していないことを表す。()の中の数字は接続表現の使用例数とそ		
こうしたら	—	1(15.6%)			

すると	—	1 (15.6%)	の接続表現の全使用数の割合である。 以降も同じである。
そうして	—	1 (15.6%)	
そうしたら	—	1 (15.6%)	
そこで	—	1 (15.6%)	
合計	24	64	

一方、順接型の接続表現の使用上の相違点として、日本語母語話者より中国人日本語学習者の方が「こうして」「こうすると」、「こうしたら」など指示語を含む接続表現を多く用いている。(13)、(14)は中国人日本語学習者の作文の例である。

(13) 私の意見は「たばこ禁止」ではなく、「たばこを吸う空間」を設けることである。こうすると、人々は皆普通に生活することができる。

(中国人日本語学習者 順接型)

(14) 公共の場で、個人の行為は必ず他の人に悪い影響がないようにすべきである。こうして、たばこを吸いたい人は他の人のために、全然吸わないようになる。

(中国人日本語学習者 順接型)

(13)、(14)はまず前文で意見や主張を述べ、後文で「こうすると」、「こうして」の接続表現を用いて、自分の意見と主張がもたらす効果を導き出すのである。このような「こうして」、「こうすると」、「こうしたら」の使用は日本語母語話者の作文にはあまり見られない。また、中国人日本語学習者は「したがって」のようなかたい順接関係を表す接続表現を用いているが、日本語母語話者は「それゆえに」、「だからこそ」のような少しやわらかい接続表現を使っている。

### 3. 5. 1. 2 逆接型接続表現の特徴

逆接型接続表現の内、日本語母語話者は「しかし」をもっとも多く用いている

(33 頁の表 5 を参照されたい)。中国人日本語学習者は「でも」がもっとも多く、その次に「しかし」が多く使われている。「しかし」も「でも」も代表的な逆接型の接続表現である。逆接的意味関係の伝達に使いやすい表現だと考えられる。しかし、書面によく使われている「しかし」と比べて、「でも」は話し言葉で、とくに論理的文章では避けられる表現である。このような文体差・文章ジャンルの差も、学習者に注意する必要があると思われる。

(15) たとえば、あなたはたばこを吸いたい、もちろんあなたはたばこを吸う権利があります。でもとなりいる人はたばこを吸いたくない。

(中国人日本語学習者 逆接型)

(16) タバコをやめることについて、いろいろな提案があるのに、人によって差があるから、実施することは難しいです。でも、人間はタバコを吸う権利があるからと言っても、タバコが本当に害をもたらすので、公的場でやめた方がいいと思います。(中国人日本語学習者 逆接型)

また逆接型接続表現は、日本語母語話者の方が「だからといって」、「それなのに」のような意味と用法の上で少し複雑な接続表現を使用しているが、このような表現は中国語日本語学習者には見られなかった。これは中級レベルの学習者はこのような複雑な接続表現をまだ使いこなしていないことを示している。

### 3. 5. 2 多角的接続関係

多角的接続関係には添加型と対比型と転換型がある。調査結果は表 6 のとおりである(次頁)。添加型の接続表現は日本語母語話者が合計 50 例(28.4%)を使用しているのに対し、中国人日本語学習者がやや少ない 62 例(27.6%)<sup>12</sup>を使用している。対比型の接続表現は日本語母語話者と中国人日本語学習者とともに 8 例である。転換型の接続表現は両者とも出現例が少なく、日本語母語話者は 4

<sup>12</sup> 平均使用率が少ない。

例(2.3%)で、中国人日本語学習者は3例(1.3%)である。多角的接続関係における接続表現の使用は、量的から見れば、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな差が見られなかったが、各類型における接続表現の選択は日本語母語話者と中国人日本語学習者の間にずれが見られた。

表 6. 添加型・対比型・転換型の使用状況

添加型	母語話者	学習者	対比型	母語話者	学習者
また	23(46.0%)	19(30.6%)	ましてや	3(37.5%)	—
そして	12(24.0%)	10(16.1%)	むしろ	2(25.0%)	—
それに	5(10.0%)	8(12.9%)	一方	1(12.5%)	5(62.5%)
しかも	3(6.0%)	3(4.83%)	逆に	1(12.5%)	1(1.25%)
その上	2(4.0%)	4(6.45%)	それに対し	1(12.5%)	—
次に	1(2.0%)	6(9.67%)	他方	—	1(12.5%)
第二に	1(2.0%)	1(1.61%)	または	—	1(12.5%)
あと	1(2.0%)	—	合計	8	8
そのとき	1(2.0%)	—	転換型	母語話者	学習者
二つめに	1(2.0%)	—	では	2(50.0%)	—
さらに	—	4(6.45%)	そもそも	1(25.0%)	—
最後に	—	3(4.83%)	それならば	1(25.0%)	—
と同時に	—	2(3.23%)	ところで	—	2(66.7%)
それから	—	1(1.61%)	さて	—	1(33.3%)
もう一つ	—	1(1.61%)	合計	4	3
合計	50	62			

### 3. 5. 2. 1 添加型の接続表現の使用状況

表6のように添加型の接続表現では、日本語母語話者は「また」と「そして」の使用がもっとも多く、それぞれ23例(46.0%)と12例(24.0%)用いている。中国人日本語学習者は日本語母語話者と同じく「また」と「そして」の使用がもっとも多く、19例(30.6%)と10例(16.1%)である。

「次に」、「さらに」、「最後に」のような前後順序を表す接続表現は日本語母語話者より中国人日本語学習者の方が多く使用していて、日本語母語話者の使用例は見られなかった。(17)のように中国人日本語学習者は「最後」を用いて論理展開順序を示した。一方、中国人日本語学習者と比べ日本語母語話者はこのような場合に「あと」のような表現を用いている。

(17) 最後に、たばこに浸っている人々は、自分の健康を考えなくても、他人にめいわくをかけないようにしないのでしょうか。

(中国人日本語学習者 添加型)

(18) 最后，沉浸于香烟里的人们，即使不为自己的健康考虑，难道不应不为他人带来不便吗？这也是一项义务吧。(例17の中国語訳文<sup>13</sup>)

なお、(18)は(17)に対する中国語訳である。(17)、(18)を比較すると分かるように、母語である中国語の影響が多少あると考えられる。日本語の「次に」、「さらに(さらに)」、「最後に<sup>14</sup>」のような接続表現は中国語の中に形態も機能も類似した表現がある。今回利用したコーパスにある例(17)に対応する中国語の例(18)は、「最后」(最後)の使用が見られる。

<sup>13</sup>国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」に1つの作文に日本語版と対応する母国語版の文章を収録していて、中国語の訳文は母国語版作文からそのまま引用した。

<sup>14</sup>石黒(2009: 77)は「最後に」に「最後」も含むと指摘している。

### 3. 5. 2. 2 対比型と転換型の接続表現の使用特徴

対比型と転換型の接続表現は日本語母語話者と中国人日本語学習者の両者ともに使用数が少ないが、対比型と転換型で使われる接続表現の種類には日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな相違が見られた。日本語母語話者の作文に現れた種類の対比型・転換型の接続表現は中国人日本語学習者の作文に用いられていない。表6の通り、対比型において、日本語母語話者は「ましてや」、「むしろ」の使用が多いのに対して、中国人日本語学習者にはその使用が見られなかった。逆に、中国人日本語学習者は「一方」の使用がもっとも多かったが、日本語母語話者は1例しかなかった。転換型の接続表現についても同じことが言える。日本語母語話者は主に「では」、「そもそも」、「それならば」を使っているのに対し、中国人日本語学習者は「ところで」と「さて」を使って転換関係を表している。

この相違については、前節(3.5.1.2、34頁)で述べたような中国人日本語学習者のレベルの問題であることが考えられる。「一方」と「ところで」は比較的早い段階で学習できる接続表現であるが、「ましてや」、「むしろ」、「そもそも」、「それならば」は中級レベルの中国人日本語学習者にとってまだ使いこなせていない接続表現であると考えられる。

### 3. 5. 3 拡充的合成関係

拡充的合成関係には同列型と補足型の接続表現がある。表7に示したとおり、同列型において、中国人日本語学習者は日本語母語話者より接続表現の使用例が多く、中国人日本語学習者は37例(16.4%)であるのに対し日本語母語話者は25例(14.2%)である。逆に補足型においては、日本語母語話者の接続表現の使用は中国人日本語学習者よりずっと多く、日本語母語話者は17例(9.7%)であり、中国人日本語学習者はわずか3例(1.3%)だけである(次頁の表7を参照されたい)。拡充的合成関係において、日本語母語話者は同列型接続表現と補足型接続

表現をほぼ均等に使用しているのにたいして、中国人日本語学習者はもっぱら同列型の接続表現だけを使う傾向があると言える。

表 7. 同列型と補足型の接続表現の使用状況

同列型	母語話者	学習者	補足型	母語話者	学習者
つまり	8(32.0%)	4(10.8%)	なぜなら	11(64.7%)	—
たとえば	5(20.0%)	16(43.2%)	ただ	3(17.6%)	—
まず	5(20.0%)	7(18.9%)	なぜかとい うと	1(5.88%)	2(66.7%)
第一に	2(8.0%)	1(2.70%)	ただし	1(5.88%)	—
現に	2(8.0%)	—	と申しま すのも	1(5.88%)	—
とくに	1(4.0%)	5(13.5%)	という のは	—	1(33.3%)
要するに	1(4.0%)	1(2.70%)	合計	17	3
一つめに	1(4.0%)	—			
せめて	—	2(5.40%)			
とりわけ	—	1(2.70%)			
合計	25	37			

### 3. 5. 3. 1 同列型と補足型の接続表現の使用特徴

同列型の接続表現について、日本語母語話者は「つまり」の使用例が多く、中国人日本語学習者は「たとえば」の使用例が多いことが分かった。また補足型については、日本語母語話者の作文に「なぜなら」が多く使われているのに対して、中国人日本語学習者の作文には「なぜなら」がまったく使われていない。この点に関して、日本語母語話者と中国人日本語学習者の文脈展開の方法に違いがあ



と思われる。

市川(1978)は「たとえば」が「例証や例示」などによく使われる接続表現であると述べている。「たとえば」の多用は「例証や例示」が多いことを示している。

「例証や例示」を挙げることによって論点の正当性が証明されることになり、読み手に納得させやすい文章にすることができる。たとえば次の(19)の例は、中国人日本語学習者が「回りの人々の健康に害も与えます」という論点を打ち出した後に、すぐその論点の正しさを支える証拠を挙げていることを示している。

(19) みんなご存じのようにタバコを吸うことは自分自身に害を与えるだけではなく、重要なのはまわりの人々の健康に害も与えます。たとえばこんでいる電車の中で空気がもう新鮮ではないのに、その時、ひとりの乗客はタバコを吸うと、みんな一緒に吸うことになりました。

(中国人日本語学習者 同列型)

一方、「つまり」は「詳述・要約・換言」によく使われる接続表現であると、市川(1978)は述べている。甲田(1996)では「つまり」や「なぜなら」などの接続表現は注釈・補充の接続表現とされ、「前の表現を受けてそのレベルを変更し、一段階上の(あるいは別の)把握・解釈として捉え直し、後件として関連づけるもの」とされている。次の(20)、(21)のように、日本語母語話者は「つまり」や「なぜなら」を使い、論点に対して注釈や補充をし、相手に自分の主張を納得させるようにする文脈展開の様式を好むようである。

(20) 主流煙が体に悪いということは当たり前ですが、副流煙も体に悪影響を及ぼします。つまり、たばこを吸わない人でも、吸っている人の傍にいれば、徐々に影響を受け、不健康になっていくのです。

(日本語母語話者 同列型)

(21) 私自身は喫煙に反対派です。なぜなら喫煙の及ぼす影響は多大なものであるからです。

(日本語母語話者 補足型)

以上日本語母語話者と中級中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用特徴を見てきた。今回の調査は浅井(2003)で行った上級日本語学習者と日本語母語話者の接続表現の調査結果と異なっている点もあれば、一致する点もある。日本語母語話者より、学習者のほうが接続表現を多用している点については、本章で調べた中級学習者の場合と浅井(2003)で調べた上級学習者の場合とで共通する特徴である。次節では中級日本語学習者の接続表現多用の要因について検討したいと思う。

### 3. 6 中国人中級日本語学習者が接続表現を多用する要因

今回の調査では、中国人日本語学習は日本語母語話者より文と文のつながりに接続表現を多く使用し、文の論理関係を明示しようとしていることが分かった。中国人日本語学習が接続表現を多用する現象は、黒岩(1994)、浅井(2002)、田代(2007)などの研究でも指摘されているが、その理由については、「母語話者では接続表現を使わない場合でも学習者は接続表現を使うためだと思われる」(浅井 2003 : 94)との指摘にとどまる。しかし、母語話者が「接続表現を使わない場合」が具体的にどんな場合かは触れていない。文の論理関係を明示するときに接続表現を使う、明示しないときに接続表現を使わないとしたら、それぞれの場合が一体どんな場合かを明確にしなければならない。接続表現の使用・不使用の原理は簡単ではないが、本章では、次の(22)のように3つに分けて、学習者が接続表現を多用する要因を考えたいと思う。

- (22) 要因1 —— 文脈展開の様式特徴から生じる多用
- 要因2 —— 使ってはいけない場合に使う
- 要因3 —— 省略してもいい場合に省略しない

### 3. 6. 1 原因 1——文脈展開の様式の特徴から生じる多用

学習者は学習者なりの文脈展開の様式を持ち、日本語母語話者と違った文脈展開様式ゆえに接続表現を使わざるを得ない場合もある。

日本語母語話者の作文においては、文の最初にまず自分の主張を述べ、続いて自分の主張を支持する論拠を述べ、文の最後にもう一回自分の主張を繰り返す文脈展開の様式をとる傾向がある。文の最後に自分の主張を繰り返すとき、「だから」「そのため」などの論理的関係の順接を表す接続表現を用いる。次の例(23)のようである。

(23) 喫煙を規制することに私は賛成です。 たばこの煙には2種類あって、口から吐かれる煙である主流煙と、たばこに火をつけた状態でたばこから絶えず出ている副流煙があります。主流煙が体に悪いということは当たり前ですが、副流煙も体に悪影響を及ぼします。(…中略…) また、たばこを公共の場所で吸えないというように法律で規制することは、たばこを吸うなと禁止しているわけではないので、マナーを守って吸うことや、たばこが害になるとわかって吸う分には一向に構わないと思います。だから私は喫煙する場所を定めるなどの喫煙を規制することに賛成です。

(日本語母語話者)

(24) 私は喫煙者に対して何らかの規制は必要だと考えます。 これは私がタバコを吸わないからです。私は学校の授業などで、タバコの性質や周りに与える影響を知る度に、何故こんなにも害のあるタバコを人々は吸うのだろうという疑問と、怒りを覚えました。タバコというのは、吸う人よりもむしろ吸わない周りの人々に害が出るというのです。(…中略…) タバコはお酒と違って何の利点もないのに、やめられないと言うのは、ある意味タバコは麻薬みたいな物だと思います。ですから早いうちにやめさせるべきなのです。そのため、国が作るある程度の規制は仕方ないと思います。 そうすることが一番、誰にとっても良い結果になる

と信じています。

(日本語母語話者)

(23)はまず文章の最初に「喫煙を規制することに私は賛成です」と自分の主張を述べ、そのあと喫煙を規制する理由を論じ、最後に「だから、私は喫煙する場所を定めるなどの喫煙を規制することに賛成です」と順接の接続表現「だから」を用いてもう一度主張を繰り返す。(24)も同じパターンの例である。最初に「私は喫煙者に対して何らかの規制は必要だと考えます」と主張を示す。最後に「そのため、国が作るある程度の規制は仕方ないと思います」と改めて主張を表明する。

中国人日本語学習者の場合は、最初から自分の主張を述べずに、いきなり「喫煙」それ自体の長点と欠点を論じ、自分の主張をその間に何箇所かに点在させる文脈展開の様式をとる傾向がある。自分の主張を表明するたびに、順接の接続表現を使う。次の(25)を参照されたい。

(25) たばこを吸っては、悪いこともあれば、いいこともあるし。このものが体に悪いだと誰でも知っているでしょう。しかし、たばこを吸ってから、頭がよく働けると、いいアイデアを考えて来たこともよくあるのだもん。こう言えば、たばこの問題は別の時間・場合と人によって、違う解決方法があるべきだ。だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう。社会、あるいは、コマーシャルとか、周りの人とか、みんな手を出さないで積極的に吸わせること、また、禁止すること、両方ともしないべきだと思う。だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面に「これが体に悪い」だけと書いた方がいい。(…中略…) 権利が平等の物だよね。だから、バスやレストランなど公共の場所でたばこを吸えないべきだ。

(中国人日本語学習者)

(25)は、日本語母語話者と違って、文章の最初に自分の主張を示さずに、「喫

煙」について論じ始めている。喫煙の良さと悪さ、喫煙に対して取る措置、喫煙者の権利などを論じている間に、「だから、吸うかどうか、人を自分で決めさせるはずでしょう」、「だから、テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、たばこ箱の表面にこれが体に悪いただけと書いた方がいい」と自分の主張を示している。また、文章の最後に「だから、バスやレストランなど公共の場所でたばこを吸えないべきだ」と主張を改めて表明する。このように、学習者は「喫煙」ということを分析していくうちに、徐々に自分の主張を示し、そのたびに順接型接続表現「だから」を用いている。主張表明の回数が多いために、順接型接続表現の使用も多くなると考えられる。つまり、日本語母語話者と違った文脈展開の様式をもっているため、学習者の接続表現、とくに順接型接続表現がより多く使われているのである。

### 3. 6. 2 原因 2——使ってはいけない場合にってしまう

使ってはいけない場合とは、使うと不自然・非文法的な接続になってしまう場合である。こういう場合に、母語話者は無論使わない。しかし学習者は接続表現を使ってしまうことがある。たとえば次の(26)のような例である。

(26) 当たり前、だれにもたばこを吸う権利があるはずです。とりわけ現代の個人の権利を重視する社会では、人々は自分の権利を持っているはず  
です。だから、一方、別の人にはたばこを吸われない権利もあります。

(中国人日本語学習者)

「だから」は順接関係を表す接続表現で、「一方」は対比関係を表す接続表現である。(26)は文の一つの場所に「だから」と「一方」が同時に使われている。前の文脈からみれば、「たばこを吸う人の権利」から「たばこを吸わない人の権利」への展開は、対比の関係が強く、「一方」を使うほうが適切である。「だから」の使用は余計になってしまい、不自然な文になる。このように、使っては

いけない場合に学習者が接続表現を使ってしまい、その結果、接続表現の数が多くなると考えられる。

### 3. 6. 3 原因 3——省略してもいい場合に省略しない

文章の簡潔性を保つため母語話者は接続表現を省略することがある。一方、学習者は省略してもいい場合に省略しないことがある。

日本語接続表現の省略問題は市川(1978)、佐久間(1992b)、馬場(2006)などの先行研究で詳しく述べられている。先行研究の調査結果をまとめると、日本語母語話者による日本語接続表現の省略率は次の表 8 のようになる。

表 8. 日本語母語話者による日本語接続表現の省略率(%)

接続類型	市川	佐久間	馬場
順接型	45	50	58
逆接型	14	8	23
添加型	61	58	69
対比型	67	71	66
転換型	24	37	29
同列型	57	73	78
補足型	54	65	71

表 8 に示したとおり、逆接型と転換型の接続表現は省略されにくいですが、順接型→対比型→添加型→補足型→同列型の順で、省略率が高くなっていく。(27a)、(28a)は日本語母語話者の作文から取り出した接続表現省略の例である。

(27)a 私の身近に愛煙家は居る。父親、先輩、友達や駅のホームでも愛煙家の姿を、見ることができる。規制が厳しくなったからといって喫

煙者が減ったりすることは無さそうに感じる。

(日本語母語話者)

- b ①私の身近に愛煙家は居る。②(たとえば)、父親、先輩、友達や駅のホームでも愛煙家の姿を、見ることができる。③(だから)、規制が厳しくなったからといって喫煙者が減ったりすることは無さそうに感じる。

(日本語母語話者 ①、②、③の番号は筆者によるものである)

- (28)a その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。それはタバコの煙に含まれて発せられる副流煙という煙の方が害になるからです。

(日本語母語話者)

- b ①その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。②(なぜなら)、それはタバコの煙に含まれて発せられる副流煙という煙の方が害になるからです。

(日本語母語話者)

(27a)は、3つの文の間に接続表現が使われていないが、(27b)のような接続表現が省略されていると考えられる。(27b)のように①と②の間に同列の接続表現「たとえば」を入れることができ、②と③の間に順接を表す「だから」のような接続表現を入れることができる。(28a)も、(28b)に示したように①と②の間に「なぜなら」を補うことができる。

このような省略してもいい場合に、次の(29)の例のように学習者が接続表現を省略しない傾向がある。

- (29) ①新聞によると、毎年タバコで死亡した人が世界の全死亡者数の割合はだんだん高くなったそうです。②ですから、タバコを吸わないような規則を作るべきだと思います。③みんなご存じのようにタバコを吸うことは自分自身に害を与えるだけではなく、重要なことはまわりの人々の健康に害も与えます。④たとえば、こんでいる電車の中で空気がもう新鮮ではないのに、その時、ひとりの乗客はタバコを吸うと、みんな一緒に吸うこ

とになりました。⑤その上、医学によって、タバコを吸う人よりまわりの人のほうが受けた毒害が多いです。⑥また、電車は人々に対して通勤に欠けないことで、毎日毎日乗らなければなりません。⑦それで、人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、汚染された空気を呼吸せざるをえない。⑧それはどんなにひどいことだろうか。

(中国人日本語学習者)

例(29)の中で、8の文の7つのつながりに、接続表現は5つも使われている。使われていないのは③と⑧の2箇所だけである。⑤の「その上」と⑥の「また」、⑦の「それで」は省略しても、文章の理解に支障がないと思うが、学習者は省略せずに連続的接続表現を使っている。

### 3. 7 まとめ

本章は中級中国人日本語学習者(43名)の作文の接続表現の使用特徴について日本語母語話者(44名)と比較しながら調査分析を行った。接続表現の使用数について日本語母語話者の176例(24.6%)に比べ日本語学習者は225例(28.4%)と多く使用することが分かった。添加型(28.4% : 27.8%)と対比型(4.5% : 3.6%)と、転換型(2.3% : 1.3%)の接続表現の使用は、両者ほぼ同じである。逆接型(27.3% : 21.3%)の接続表現は日本語母語話者のほうがやや高く、同列型は学習者のほうがやや高くなっている。差が大きいのは順接型(13.6% : 28.4%)と補足型(9.7% : 1.3%)である。順接型は、学習者のほうが圧倒的に多いのに対して、補足型は母語話者のほうが多い。このような調査で明らかにした接続表現の使用状況を市川(1978)の類型法で類型化し、類型化した接続表現を種類別に詳しく考察した。選択される接続表現の種類から見れば、学習者は話し言葉向けの接続表現の、「こうして」、「こうすると」などのような指示語を含む接続表現の使用が特徴的である。また、中級学習者にとっては「むしろ」、「ましてや」等が学習できていないため使えない種類の接続表現になっている。



学習者による接続表現多用の要因について、接続表現の誤用による多用、省略しないことによる多用、文脈展開の様式の特徴から生じる多用の3種に分類した。

## 第4章 日本語母語話者と中国人日本語学習者の 作文における論理的文脈展開の異同

前章では日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における「接続表現」を調査し、両者の作文に使われる「接続表現」の異同を比較した。本章では前章の調査で得た日本語学習者と中国人日本語学習者の接続表現の使用状況に基づき、接続表現の使用の共通点と相違点から生じた両者の文章の論理展開の異同を分析する。

### 4.1 はじめに

近年、日本の大学・大学院に留学を希望する留学生が年毎に増え続けている。このような大学・大学院など日本の高等教育機関で勉学しようとする留学生にとっては、特に大学で必要となる論理的に文章を構成する能力が要求されると思われる。つまり、講義や演習での課題レポートや学位論文を論理的且つ分かりやすく作成する能力が必要となる。ところが、日本語学習者による論説的文章には、一読しただけでは論理性が乏しいため、書き手の表現意図が伝わりにくいものが散見されている。その原因の1つは接続表現にあると考えられる。田代(2007)は学習者の作文に順接的展開が多く、逆接的展開が少ないため主張の制限、反駁<sup>15</sup>の論理展開が日本語母語話者ほど多くないことを指摘している。

接続表現を手掛かりにし、日本語学習者の論理展開を考察する理由は、市川

---

<sup>15</sup> 「主張の制限、反駁」について、田代(2007:140)は「接続詞を用いることにより、書き手は自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えることによって議論の精緻化を行い、自分の意見をより強いものとしようとしている」と述べている。例として田代(2007:140)は「(10) 私はタバコが嫌いですから、規制には基本的に賛成です。しかしただ単に禁止一点張りでは、その規制は功を奏すことはないでしょう。」を挙げている。

(1978 : 88)の「文脈における思考方式を端的に示すものは、文と文をつなぐ接続語句である。接続語句の使い方に注目すれば、筆者の思考のあとをたどることができる」という指摘と関係するものである。従来から日本語学習者と日本語母語話者の文章の論理性に関する対照研究は接続表現に注目したものが多かった。確かに接続表現が書き手の思考方式を反映すると思われるため、文章の論理展開を検討する際に、接続表現を中心にするのは間違いではないが、一方で、実際の書き言葉に接続表現が用いられる率はそんなに高くないのが現実である。書き言葉における接続表現の使用率については石黒(2009:74)が「書き言葉では、多くの場合 10%台であり、10%を切る文章も少なくない」と述べている。この使用率の少ない接続表現のみを手掛かりにして、日本語学習者の論理的文脈展開の特徴を明らかにすることができるという考え方について筆者は疑問を抱いている。

そこで、本章は作文における接続表現の使用について考察するだけでなく、いままで注目されてこなかった接続表現が用いられていない部分の文の接続実態も考察対象に取り入れることにした。そのため、本章では作文における接続表現が用いられる部分と用いられていない部分をあわせて、市川(1978 : 88)の名称に従って、「文の接続」と呼ぶことにする。接続表現が明示されていない部分の論理的文接続については接続表現を「無理なく補う」<sup>16</sup>作業を通して判断する。そして市川(1978)で示された接続表現の機能に基づいた文の接続に関する類型を使い、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続関係を分類し、両者の文接続関係の共通点と相違点から、両者の論理的文脈展開の異同を考察する。

## 4. 2 先行研究

論理的文脈の展開を具体化する文と文のつなぎ方を考える際に、接続表現の

---

<sup>16</sup>市川(1978 : 89)は「接続語句は、文脈における思考方式を端的に示しはするが、実際には、接続語句の用いられない場合も多い」という考え方を出発点として、文の接続関係を解明するための方法として、「無理なく接続語句を補う」ことを提唱している。

役割を無視することはできない。だから、日本語学習者の作文における展開を考察する際に、接続表現を手掛かりとする先行研究が多いのである。その中に、日本語母語話者と日本語学習者の作文における論理的文脈展開の特徴を分析した研究に市川(1988)、原田(2003)がある。

市川(1988)は初中級レベルの学習者を対象に、文の接続を中心とした、接続詞による文脈展開習得状況を考察している。接続詞の文脈展開の方向を「たて」「よこ」に二分し、文脈展開の方向と量を、直線を使って明示的に図示して把握させることを基本としている。順接・逆接・転換等論点の推進発展に役立つものが「たて」に伸びる接続詞であり、同列・対比・補足・添加等論点を進化拡充するものが「よこ」に広がる接続詞であるとしている。

原田(2005)は日本語学習者のレポート・小論文の文脈展開を明瞭にするため実態調査を行った。実態調査の内容は主に日本語母語話者と日本語学習者の小論文の文頭に位置する接続表現の使用頻度と接続表現の分布について調査した。「しかし、また、そして、たとえば」は両者ともに多く使用されているが、「このように、たしかに、そのため」は日本語学習者は不使用なのに対し「でも、ですから、それに」は上級日本語学習者のみが使用している。また「小論文の中間部では、上級日本語学習者は文の添加や話題の転換を行っているものの、適切な接続表現を使用していないことが多く、日本語母語話者は様々な表現を駆使していた。小論文の後部では、上級日本語学習者は要約しようとしていながら、その主旨が不明瞭なことが多いが、日本語母語話者は、要約を表す表現の他にも、多様な注釈の表現を使用していた」と指摘している。

これらの先行研究は日本語母語話者と中国人日本語学習者の論理的文脈展開を考察するために、主に作文に用いる接続表現に着目している。だが、上で見た石黒(2009)の指摘のように書き言葉に使用されている接続表現が全文の10%しか占めていないのであれば、文章に明示される接続表現だけに注目していたのでは、文章の論理的文脈展開の全貌を明らかにすることはできだろう。前章で示したように日本語母語話者の作文における接続表現の使用率は24.6%であり、中国人日本語学習者の同じタイトルの作文の接続表現の使用率は28.4%に

なっている。したがって、接続表現が用いられない部分への考察も必要となる。このような現状に基づき本章では作文に明示されている接続表現だけの考察ではなく、接続表現が用いられていない部分に接続表現を「無理なく補う」という作業を行い、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的文脈展開の実態を把握したいと考える。

### 4. 3 接続表現

本章の文の接続関係の認定は市川(1978)の類型法を用いたため、市川(1978)の「接続語句」と佐久間(1992)・石黒(2009)の「接続表現」の関係について簡単に述べておこう。両者の関係は仁田・益岡(2002:135)によれば、「文章・談話における文連鎖<sup>17</sup>の解明には、市川の接続語句よりさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。接続表現には、用言の連用形・節・文・連文・段落などの言語単位による接続機能を有する表現を含める」とされている。つまり、接続表現は文接続の機能上接続語句と同様なものであるが、それはただ文章・談話の研究に応じて接続語句の範囲が拡大されただけなのである。したがって、文接続型の解明には接続語句の代わりに、接続表現という用語を採用したとしても矛盾のないことである。また接続表現という場合、複文の接続助詞も含めて考える立場もあるが、第2章の先行研究の検討で述べたように本研究は文を超えるレベルで働くもののみを接続表現として調査の対象とするため、複文の接続助詞は考察対象から除外した

### 4. 4 文の接続関係

接続表現の機能によって形成される文の接続関係の認定について、本節では多くの先行研究で取り上げられている市川(1978)の「文の接続関係」の類型を採用する。市川(1978:89-93)によれば、「文の接続関係」は文と文との論理的関

---

<sup>17</sup>文の連接

係であり、文脈形成の特徴により 3 つのグループと 8 つの基本類型に区分されている。文と文の関係を接続表現によって決めることにより、その分類・定義及び代表的な言語形式を次の表 9 のようにまとめている。表 9 中の① - ⑧の全てが本章における分析のために利用する項目である。

表 9. 市川(1978)の「文の接続関係」

(1) 論理的結合関係：二つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係。	
①順接型	<p>前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型</p> <p>〔順当〕 = だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため          そういうわけで、それなら・とすると・してみれば・では(以上、仮定的な意)</p> <p>〔きっかけ〕 = すると・と・そうしたら 〔結果〕 = かくて・こうして・その結果</p> <p>〔目的〕 = それには・そのためには</p>
②逆接型	<p>前文の内容に反する内容を後文に述べる型</p> <p>〔反対、単純な逆接〕 = しかし・けれども・だが・でも・が、といっても・だとしても(以上、仮定的な意)</p> <p>〔背反・くいちがい〕 = それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず</p> <p>〔意外・へだたり〕 = ところが・それが</p>
(2) 多角的連続関係：二つ(以上)の事柄を別々に述べる関係。	
③添加型	<p>前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型</p> <p>〔累加、単純な添加〕 = そして・そうして</p> <p>〔序列〕 = ついで・つぎに</p> <p>〔追加〕 = それから・そのうえ・それに・さらに・しかも</p> <p>〔並列〕 = また・と同時に</p> <p>〔継起〕 = そのとき・そこへ・次の瞬間</p>

④対比型	<p>前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型</p> <p>〔対比〕＝というより・むしろ(以上、比較してあとのほうをとる)、ましていわんや(以上、比較されるものをふまえて、著しい場合に及ぶ)</p> <p>〔対立〕＝一方・他方・それに対し(以上、対照的な対立)、逆に・かえって(以上、逆の関係の対立)、そのかわり(交換条件)</p> <p>〔選択〕＝それとも・あるいは・または</p>
⑤転換型	<p>前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型</p> <p>〔転移〕＝ところで・ときに・はなしかわって</p> <p>〔推移〕＝やがて・そのうちに</p> <p>〔課題〕＝さて(主要な話題を持ち出す)」そもそも・いったい(以上、原本的な事柄を持ち出す)</p> <p>〔区分〕＝それでは・では</p> <p>〔放任〕＝ともあれ・それはそれとして</p>
(3) 拡充的合成関係：一つの事柄に関して拡充して述べる関係。	
⑥同列型	<p>前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型</p> <p>〔反復〕＝すなわち・つまり・要するに 換言すれば(以上、詳述・要約・換言)</p> <p>〔限定〕＝たとえば・現に(以上、例示・例証)、とりわけ・わけでも(以上、抽出)、せめて・少なくとも(以上、最小限度)</p> <p>〔換置〕＝(肯定と否定の置き換え)</p>
⑦補足型	<p>前文の内容を補足する内容を後文に述べる型</p> <p>〔根拠づけ〕＝なぜなら・なんとなれば・というのは</p> <p>〔制約〕＝ただし・もっとも・ただ</p> <p>〔補充〕＝なお・ちなみに</p> <p>〔充足〕＝(倒置的形式)<sup>18</sup></p>

<sup>18</sup> 例文：このことはもう一度調べてみる必要がある。結果はどうなるかわからないが(出典：市川 1978：92 頁)。

⑧連鎖型	<p>前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。(接続表現は普通用いられない)</p> <p>[連係] (解説附加・見解付加・前置きの表現との連係・場面構成など)</p> <p>[引用関係] (地の文と会話文の関係など)</p> <p>[応対] (問答形式)</p> <p>[提示的表現との連係] <sup>19</sup></p>
------	--

市川(1978 : 89-93)

#### 4. 5 接続表現の使用率

前章の日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現の使用状況の統計結果に基づき、両者の作文における接続表現の使用率を表 10 のように示すことにする。表 10 から分かるように 44 篇の日本語母語話者の作文が総 715 文<sup>20</sup>、43 篇の中国人日本語学習者の作文は総 790 文からなっている。中国人日本語学習者の文数のほうがやや多い。全文章中の文と文のつながりには日本語母語話者が 176 個の接続表現を用いているのに対し、中国人日本語学習者は 225 個の接続表現を用いている。接続表現の使用率は以下の算式に基いて計算した。

$$\text{接続表現の使用率} = \frac{\text{接続表現の総使用数}}{\text{総文数}} \times 100\%$$

表 10. 接続表現の使用状況

データ 対象	作文数 (篇)	総文数 (文)	接続表現 (個)	接続表現の 使用率(%)	接続表現の未 使用率(%)
-----------	------------	------------	-------------	-----------------	------------------

<sup>19</sup> 8月15日。私はこの日が忘れられない(例文出典：市川 1978 : 93)。

<sup>20</sup>本研究の日本語母語話者と日本語学習者の作文における総文数の統計は同じデータを利用した高橋・伊集院(2006)の統計と一致している。高橋・伊集院(2006 : 82)を参照。



母語話者	44	715	176	24.6	75.4
学習者	43	790	225	28.4	71.6

表10に示したように両者の文章中の接続表現の使用率は全文接続の24.6%と28.4%である。日本語母語話者と中国人日本語学習者の文接続に用いられる接続表現の使用率が共に30%未満となっている。この50%以下という接続表現の使用率だけからでは、全文章の論理的文脈展開即ち文の接続関係の実態を明らかにすることはできないと判断し、日本語母語話者と日本語学習者の文脈展開方式の研究方法についてさらに検討する必要があると考えるに至った。このような問題意識に基づき、本章は両者の作文における接続表現が用いられていない文と文の間の意味関係を考察し、接続表現を補う作業を行った。調査で得た明示的接続表現と補う作業で得た非明示的接続表現をあわせて、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における文脈展開の全貌を明らかにしたい。

#### 4.6 接続表現が用いられない部分の接続関係の認定

市川(1978:89)は「接続表現を文脈展開の指標とする考察には接続表現の用いられない時も多い」と述べている。こういう場合に関して市川(1978:100)は文と文の意味関係を踏まえ、該当するところに接続表現を「無理なく補う」方法を取ることによって文と文の接続関係を明らかにする方法を取っている。具体的な考え方として、市川(1978:100)の挙げた例と説明を見てみよう。この例においては接続表現が明示されている場合と使用されていない場合がある。市川が、接続表現がない場合、可能な接続表現を補って考えている点に注目されたい。

①詩人も小説家も脚本家も、随筆を書きます。②新聞記者も、科学者も、教育家も、政治家も、実業家も、随筆を書きます。③しかし、そういう専門家として、あるいは職業人として書いては、よい随筆はできません。④専門家なり、職業人なりから、ひとりの人間にかえって書いたものでないと、す

ぐれた随筆にはなりません。⑤そういう意味では、随筆は人間手記であり、人生の報告書であるといえましょう。(西尾実『ことばの芸術』)

①の文と同類の内容が、②の文で述べられている。②の文頭には接続表現の「また」や「さらに」を無理なく補うことができる。①と②は、「添加」として接続している。③の文頭に「しかし」が用いられるため、②と③は「逆接」となる。④の文は、③の内容をさらに詳しく説明した文。③と④の関係は「同列」である。④の文頭に、接続表現の「つまり」などを容易に補うことができる。⑤は④から導かれてくる結論的な事柄を述べた文である。「そういう意味では」、「順接」を表す接続表現と考えることができる。市川(1978:100)

本章は以上の市川(1978)の接続表現を「無理なく補う」方法を使って日本語母語話者と中国人日本語学習者の文と文の間の論理関係の解明を試みる。このような解明作業は主観的判断に伴う変異の幅が考えられるため、筆者と1名の母語話者協力者とで接続表現を「無理なく補う」ための作業を実施した。さらに、客観性を保つため、2009年10月、母語話者として新潟大学言語学ゼミの学生20名に同じ作業を行ってもらった。この2回の作業で得た結果と第3章で明らかにした接続表現の使用数をあわせて、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続関係及び文脈展開の実態を分析した。その結果は表11のとおりである。

表 11. 文接続関係<sup>21</sup>の合計数と割合

接続関係型 合計と割合	無し	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	連鎖
合計 母語話者	44	91	74	144	34	18	124	109	77
割合(%)母語話者	6.2	12.6	10.4	20.0	4.8	2.5	17.4	15.2	10.8

<sup>21</sup> 明示、非明示の接続表現の使用を合わせた分析による

合計 学習者	43	137	77	182	16	35	157	62	81
割合(%) 学習者	5.4	17.3	9.6	23.1	2.0	4.4	19.9	7.9	10.2

表 11 は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における文の接続関係に関する統計である。接続関係「無し」は各作文の第 1 文にあたる。合計数は各作文に見られる各各の接続関係の合計数である。割合率とは当該の接続型の全接続関係に占める割合である。さらに、両者の作文に用いられる文接続関係の量的相違を明らかにするため、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続型の割合率の差について計算した。結果は、表 12 のとおりである。

表 12. 日本語母語話者と中国人日本語学習者の割合率の差

接続関係(型)	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	連鎖
割合率の差(%)	4.7	0.8	3.1	2.8	1.9	2.5	7.3	0.6

表 12 の統計で、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における文接続関係の差は  $0.6 < \text{割合率の差} < 7.3$  にあることが分かった。このような割合率の差から日本語母語話者と中国人日本語学習者の文の接続即ち文脈の展開に相違があるか否かに関してさらに検討する必要がある。

#### 4. 7 考察

前節の統計を通して日本語母語話者と中国人日本語学習者の 2 集団の文章における文接続関係の合計数と割合率を見てきた。割合率の差から、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間で文の接続関係に多少差があることが明らかになった。ところが、この差は  $0.6 < \text{割合率の差} < 7.3$  の範囲で変動するもので、

一定の規律また著しい差の異なりがないため、いったい文連接全体に相違があるのかあるいは部分的な相違があるのかについて判断しにくいものとなった。つまり、以上の日本語母語話者と中国人日本語学習者の2集団の間に相違があるかないかについてはさらに考察する必要があると思われる。そのため、本章は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文に使われる8種の接続型に関して、SPSS統計パッケージ(Ver. 14.0)を使って分析した。この方法による分析で有意差が見られる接続型が、最終的に日本語母語話者と中国人日本語学習者の文連接の全体あるいは部分に差があるものと認定できるだろうと予測できる。具体的には日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における8種の接続型の分布<sup>22</sup>をそれぞれに統計し、日本語母語話者と中国人日本語学習者の2群の分布データのt検定を行った。

次の表13は日本語母語話者と中国人日本語学習者の順接型に関する分布の一部である。このような統計法を用いて、順接型の日本語母語話者と中国人日本語学習者の各作文における分布状況を統計した。さらに順接型に続けて、逆接型・添加型・転換型・補足型・連鎖型・同列型・対比型の順で日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続型の有意差の有無について考察した。

表13. 日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における順接型の分布  
(一部分だけのサンプル)

文章 番号	母語話者の作文の 順接型使用数	学習者の作文の 順接型使用数
1	1	4
2	4	2

<sup>22</sup>統計的仮説検定において、帰無仮説のもとで得られた検定統計量が実現する確率。

3	2	2
4	2	2
5	1	2
6	3	2
7	2	4
8	3	2

$t$ 検定で得られる各接続型の有意確率<sup>23</sup>( $P$ 値)は表 14 のとおりである。この有意確率( $P$ 値)は有意水準( $\alpha$ )と比較し(今回の有意水準は $\alpha = 0.05$ と設定した。)  $\alpha$ より小さければ( $P < .005$ )、日本語母語話者と中国人日本語学習者が当該の接続型の使用傾向において有意差があることを意味する。

表 14. 各接続関係の  $t$  検定結果

接続関係	有意確率( $P$ 値)	有意水準( $\alpha$ )との比較 ( $\alpha = 0.05$ )
順接型	.003	$P < .005$
対比型	.001	$P < .005$
転換型	.001	$P < .005$
補足型	.003	$P < .005$
逆接型	.937	$P > .005$
添加型	.083	$P > .005$

<sup>23</sup>統計的仮説検定を行う場合に、帰無仮説を棄却するかどうかを判定する基準。5%あるいは1%がよく使用される。

同列型	.057	$P > .005$
連鎖型	.938	$P > .005$

表 14 に示したとおり、日本語母語話者と中国人日本語学習者の文接続型に順接型・対比型・転換型・補足型に有意差 ( $P < .005$ ) が見られた。一方、逆接型・添加型・同列型・連鎖型の有意確率が有意水準より高いため ( $P > .005$ )、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に有意差が見られなかった。この結果は、作文の文脈展開に中国人日本語学習者の順接型や転換型の割合 (表 11) が日本語母語話者のそれより高いことの信頼性を裏付けるものであり、また日本語母語話者の補足型や対比型の割合 (表 11) が全体的に中国人日本語学習者のそれをお上回っていることの成立性も支持している。この中国人日本語学習者の順接型が日本語母語話者より多い、日本語母語話者の補足型が中国人日本語学習者より多いという傾向については田代 (2007) の接続表現を中心とした学習者と日本語母語話者の作文の文接続の調査において既に指摘されている。今回の調査も、それと一致する結果が得られた。一方、今回の調査は接続表現が用いられていない部分の文の非明示的な接続関係も含めて調査したため、新たな発見として日本語母語話者の対比型の使用が中国人日本語学習者より多いこと、また日本語母語話者より中国人日本語学習者の方が転換型が多いということが分かった。対比型の多用を通して、日本語母語話者は主張を述べる際に、主張の立場から一方的に論を展開するだけではなく、自分の主張に防衛力を持たせるため反証の立場にも配慮しながら論を進めていくのだと思われる。それに対し、中国人日本語学習者はこのような論の展開型をあまり取らないことが分かった。例 (30)、(31) は日本語母語話者の作文における対比型の例である。

(30) 喫煙の規制に賛成する側の言い分としては、喫煙は百害あって一利なしだから、たばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、など

である。それに対し反対する側は、喫煙者にも喫煙の権利があると訴える。

(日本語母語話者)

(31) たばこを吸っている人の近くにいるだけで、肺が汚れていくのだ。そして、肺ガンになる確率は、喫煙者よりも多いのである。(一方<sup>24</sup>)喫煙者の主張する喫煙の権利も分からないわけではない。(日本語母語話者)

さらに、日本語母語話者は文脈展開の上で主張を支える論点として、根拠付け、事例あげなどの補強作業に取り組んでいるのに対し、中国人日本語学習者は論を支える論点の補強にそれほど取り組まず、むしろ論を支えるより多くの新論点や新話題の発掘に力を入れていることが分かった。このように文脈展開における文接続の方法の相違として、日本語母語話者は補足型の使用が中国人日本語学習者より多く、中国人日本語学習者は日本語母語話者より転換型が多いということが明らかになった。たとえば、例(32)のようである。

(32) ①喫煙することによって喫煙者の体をむしばむだけでなく非喫煙者の体にも害を及ぼすのです。②例えばもしある1つの部屋に5人の喫煙者と1人の非喫煙者がいたとします。③その中で一番肺に害を成すのは非喫煙者なのです。④(なぜなら)それはタバコの煙に含まれて発せられるふくりゅう煙という煙の方が害になるからです。⑤(だから)このように自分だけでなく他人に危害・被害を与えてしまうことは絶対に許してはいけないことだと思います。⑥タバコを喫う権利は誰にでも成人者ならありますが他人の権利を犯すことはできないと思いますので公共の場でタバコを規則で一律に禁止するべきだと思います。(日本語母語話者)

例(32)を定式化すると(33)のようになる。つまり①の主張の妥当性を証明す

---

<sup>24</sup> ( )は「無理なく補う」作業で想定した接続表現を表す。

るため、日本語母語話者は②の例証、③の連鎖(前置き表現との関係<sup>25</sup>)、さらに④の根拠付け、⑤の結論、および⑥の連鎖(見解付加)などを加えて、論点①の補強のために工夫している。

(33) ①論点提出+②実例(同列)+③連鎖型+④補足型(なぜなら)+⑤順接型(だから)+⑥連鎖型

一方、中国人日本語学習者には日本語母語話者のような論点に対する補強という傾向が見られなかった。たとえば、例(34)のように①の論点を示した後、すぐ②転換型で新たな論点に入っている。そして③および④の添加によってさらに新話題を導入している。定式化すると①論点提出+②転換+③添加+④添加となる。

(34) ①逆にたばこがきれいな人もおおぜいいます。②(さて)じつは、たばこを吸うのはほんとうに体によくないです。③それに、まわりの人にもっとよくない影響を与えます。④また、お金がかかりますし…つまり、利点が全然ないと思っています。(中国人日本語学習者(

また以上の相違を除けば、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文の文脈展開には逆接型・添加型・同列型・連鎖型の使用に関してほとんど差がないことが分かった。この結果を通して、相違点とは別に異なる文化や言語に所属する人間であっても人間共通の論理的思考方式があり、そのため文章形成上に以上のような類似点・共通点が見られるのだということが分かる。

#### 4. 8 まとめ

日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的文脈展開の特徴

<sup>25</sup>市川(1978: 92)における連鎖型の下位分類の一種であり、次の「見解付加」も同じである。



を探るため、本章は3章の両者の作文における接続表現の調査結果<sup>26</sup>に基づき、両者の作文における接続表現の使用率を算出した。30%以下の明示的接続表現の使用率だけを手掛かりにしていたのでは、日本語母語話者と中国人日本語学習者の文脈展開即ち文の接続関係の解明はできないということを確認した。日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文の文脈展開の特徴を明らかにするため、両者の作文に対し、「無理なく接続表現を補う」作業を行い、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における各文の接続型の使用状況を明らかにした。さらに日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的な文脈展開を支える文接続の論理性の相違を探るため、各文章における接続型の分布のt検定を行い、それを通して日本語母語話者と中国人日本語学習者の順接型・対比型・転換型・補足型の使用率には有意差があり、逆接型・添加型・同列型・連鎖型の使用率には有意差がないことを明らかにした。

今回の調査で明らかになった順接型と補足型における日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違は先行研究の田代(2007)でも指摘されているが、新たな発見として多角的な文接続関係<sup>27</sup>によく使われる対比型と転換型において日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に相違があることが分かった。中国人日本語学習者の作文は逆接型より順接型を多用するため、主張の制限に関する論理展開が日本語母語話者ほど多くない。また、中国人日本語学習者は転換型を多用する一方で、補足型が少ないため、新話題や論点に対する解説や論証が不十分になる傾向も見られた。この現象は、中国人日本語学習者の主張の論理性や説得力が弱まる原因に繋がる可能性があり、中国人日本語学習者の日本語能力や中国語文章構造などの要因に影響を受けたものだと考えられる。この問題の解明には、使用率などの量的な分析だけではなく、中国人日本語学習者の作文の質的分析が必要だと考えられる。これについては次章でさらに詳しく検討する。

一方、日本語母語話者による対比型と補足型の多用から、日本語母語話者の

<sup>26</sup> 母語話者と学習者の作文における接続表現の使用状況と使用上の特徴を明らかにした。具体的に本論の第3章を参照されたい。

<sup>27</sup> 二つ(以上)の事柄を別々に述べる関係。添加型・対比型・転換型がある。市川(1978:93)を参照。

主張展開は主張の正面だけではなく、論点の防衛力を高めるため、反証の面からの論説も少なくないといえる。この場合はとくに対比型がよく用いられる。このような論の展開型は中国人日本語学習者においては少なかった。また日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における文の接続関係の相違に加えて、今回の調査は日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に文の接続関係に共通の傾向があることも明らかにした。この結果は、人間の論理的思考方式というものが文化や言語の隔たりを超え、重なる部分も多いことを証明している。

## 第5章 日本語母語話者と中国人日本語学習者における 接続表現の省略に関する対照研究

### 5.1 はじめに

第3章では、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文コーパス<sup>28</sup>に用いられる接続表現について調査し、両者の文章における接続表現の使用上の諸特徴を明らかにした。特徴の1つは、日本語母語話者より中国人日本語学習者のほうが接続表現を多用することである。学習者が接続表現を多用することは多くの先行研究で指摘されている。例えば日本語母語話者と日本語学習者の作文における接続表現使用量を調査した黒岩(1994)、浅井(2003)、田代(2007)などである。だが、これらの研究は日本語学習者の作文における接続表現の多用の要因については特に指摘していない。日本語学習者の接続表現の多用に関して、第3章では日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文に用いられる接続表現の使用特徴に関連して、中国人日本語学習者の接続表現の使用量が日本語母語話者より上回っている要因を3つにまとめた。つまり、学習者が接続表現を運用する時「①文脈展開の様式特徴から生じる多用である。②使ってはいけない場合に接続表現を使ってしまう。③省略してもいい場合に省略しない。」の3つの要因があるとした。この3つの要因はそれぞれ文脈展開の様式、接続表現の誤用、接続表現の省略の3つの面に関わっている。これらの日本語学習者の接続表現における多用の諸要因は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用特徴からまとめたものであって、さらに量的に検証する必要があると考えた。その点を明らかにするため、第4章では文脈展開の様式について、日本語母語話者と中国人学習者の共通点と相違点を量的に考察した。本章では、接続表現の省略における日本語母語話者と中国人学習者の共通点と

<sup>28</sup>国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母国語訳との対訳データベース ver. 2」。本研究の第3章3.3節を参照(27頁)

相違点について量的に考察する。日本語母語話者の接続表現における省略状況に関しては市川(1978)、佐久間(1992b)、馬場(2009)などによって研究されている。その中市川(1978)の日本語母語話者に対する接続表現の省略意識調査において用いられた2種の【調査A・B】は多くの先行研究に引用されている。本研究はこの2種の【調査A・B】をそのまま利用し、中国人日本語学習者を対象に調査を実施した。今回の調査結果の集計によって中国人日本語学習者の接続表現の省略状況を明らかにした。さらに、先行研究で明らかにされている日本語母語話者の結果と比べ、両者の相違点またそれぞれの特徴をまとめたい。最後に、日本語母語話者と中国人日本語学習者との相違点を形成する要因を分析する。日本語学習者に日本語における接続表現の省略の手本を示すことができると願っている。

## 5. 2 先行研究

市川(1978 : 70-80)は「どういう接続語句は省略しやすく、どういう接続語句は省略しにくいか、あるいは、どういう場合は接続語句を必要とし、どういう場合は必ずしも必要としないか」という問題について、客観的に分析する手掛かりを得るために、A、Bの2種の調査を行った。【調査A】では、各種の文脈のモデルについて、【調査B】では、実際の文脈例について、それぞれの接続語句を省略しうるか否かを調査した。市川(1978)の【調査A】は、2文からなる各種の文脈のモデル23例について、それぞれの傍線の接続語句を省略しうるか否かを指摘させたものである。次の1-23は【調査A】に用いた接続表現を含む文脈例である。

### 【調査A】

1. ……先日はどうも失礼いたしました。( ) ところで、例の件は、どうなりましたか。
2. ……というような次第です。( ) さて、本題にはいりましょう。

3. あしたの天気はどうなるだろう。( ) ともあれ、今夜は早く寝るとしよう。
4. 朝早く目をさました。( ) そして、すぐしたくにとりかかった。
5. 彼は頭もよい。( ) また、健康にも<sup>まご</sup>恵まれている。
6. 足を開いて、両手を腰に。( ) つぎに、上体を前後に曲げます。
7. 私はひどく疲れていた。( ) そのうえ、少し熱があった。
8. 来週の水曜日に例会を開きます。( ) なお、今回は特に先生も出席されます。
9. 多数の生徒が風邪で欠席した。( ) そのため、学級は四日間閉鎖された。
10. 並木道を歩いて行った。( ) すると、向こうから一人の男が近づいてきた。
11. 彼はついにその難関を突破した。( ) かくて、彼の宿願は達せられた。
12. 値段は少々高い。( ) しかし、種類は豊富だ。
13. 私は全力を尽くした。( ) それなのに、結果は思わしくなかった。
14. 天気予報では晴れるはずだった。( ) ところが、雨になった。
15. 例会には出席する予定です。( ) ただし、少し遅刻するかもわかりません。
16. 100メートル14秒というところが精一杯です。( ) まして、12秒で走れるはずがない。
17. 兄は右の道を進んだ。( ) 一方、弟は左の道を選んだ。
18. 遊びに行ってもいい。( ) そのかわり、帰ったらすぐ勉強しなさい。
19. 思いきって言おうか。( ) それとも、やはり黙っていようか。
20. この本は子どもの読み物として適切である。( ) すなわち、内容は子どもの生活に密着しており、ことばもやさしく、さし絵も楽しい。
21. 素晴らしいながめ(風景)だ。( ) とりわけ、夕日のさしている林と丘は、まるで絵のようだ。
22. この文章は、しくみが粗雑なうえに、用語も不適切だ。( ) 要するに、悪文である。
23. 私は知っていた。( ) なぜなら、わたしはそれを前に本で読んだことがあった。

次の(一)(二)は、【調査 B】に用いた段落の例である。

### 【調査 B】

- (一) いまから三千万年たらずまえの時代に、地球上の気候が、前よりも著しく乾いてきて、いままで馬の住みかであった森林が乏しくなり、草原がしだいに広がった。(1)こうして ( )、森林に住む馬の中から、草原でくらす馬が現れてきた。(2)もっとも ( )、草原の馬が現れるとともに森林の馬が減びてしまった、というわけではない。その後長く、両方の馬は、合い並んで生活していた。(3)しかし ( )、草原の馬では、この新しい住み場所での生活に都合のいいように、体にいろいろ変化が生まれ続けたのにたいして、森林の馬では、体の変化が著しくすくない。(4)やがて ( )、氷河の時代に、森林の馬の仲間は、滅び去り、地球上から姿を消してしまった。たぶん、この仲間が住んでいた森林が、寒さや、空気のかわきで枯れたときに、その森林と運命をともにしたのであろう。(5)ところで ( )、草原の馬は、生活のどういう変化のために、体にどんな変化が起こったのであろうか。まず食物から考えると、森林の若草や下草は割合柔らかいが、草原の草は、それに比べると、いっばんに硬い。(6)そのために ( )、草原の馬の歯が、だんだんに変化した。(7)さらに ( )、早く敵を発見するための必要から、背が高く、首が長くなっていた。
- (二) 犬は、主人が新しい家に引越したときでも、主人が傍にいさえすれば、安心して新しい家に住もうとします。(8)ところが ( )、猫は、主人の引越した新しい家にはなかなかなじもうとはしません。おり(機会)があればもとの家に帰ろうとします。このようなことから、犬はよい動物で、猫は悪い動物だと考える人もあるようですが、そう考えるのは、人間の身勝手な態度で、猫のためにたいへんきのどくです。(9)つまり

( )、このような違いは、それぞれがもともと持っていた性質なので、人間の側からだけ見て、よいとか悪いとかいうことはできません。犬は牛肉を喜んで食べますが、猫は牛肉を好まないように見えます。動物たちが、好きな食物と、きれいな食物とを選び分けるのは、おもに匂いを嗅いで決めます。(10) だから ( )、このような犬と猫との違いは、好みの匂いが違っているのだということを表しています。(11) そうして ( )、このような好みは、野生のものが飼いならされても、そう変わらないように見えます。

(市川 1978 : 72-76)

この【調査 A・B】の結果から、市川(1978 : 77)は「接続語句を省略しうるか否かという判断には、どうしても主観的要素がともなう。しかし、多数の被調査者の見解を総合すれば、かなり客観的な傾向をうかがうことができるはずである」と述べている。さらに省略率の高い接続語句と省略率の低い接続語句について、市川(1978 : 78)は「接続語句には、補助的用法のものもあれば、必須的用法のものもあるということである」と指摘している。補助的接続語句と必須的接続語句の関係について市川(1978 : 79)は「接続語句は、その用法として、補助の場合と必須的な場合とが区別され、接続語句によって、そのどちらの傾向が強いかが一応指摘できるが、しかし、それは文脈によってかなり浮動し、必須的なものが補助的なものに、また、補助的なものが必須的なものに転化するという場合がある」と述べている。

文章論の観点から日本語における接続表現の省略と用法を明らかにするため、佐久間(1992b)は市川(1978)の【調査 A・B】を使い、72名の大学生を対象に調査を実施した。同じ接続の言葉の省略に関する研究だが、市川(1978)との大きな違いは市川(1978)の「接続語句」の代わりに佐久間(1992)は「接続表現」という用語を用いている点である。接続表現の定義について、佐久間(1992b : 63)は「二つの言語単位の間中に位置して、前後の表現の論理的・意味的關係を結合する機能を担う言語形式である。品詞論における接続詞・接続助詞、構文論におけ

る接続語、文章論における接続語句は、それぞれの対象領域での種々の規模の接続機能を担う表現を扱うものであるが、本章で取り上げる接続表現は、最大の言語単位である文章・談話の内部における文脈の様相を示すものとして位置づける」と述べている。さらに文接続における接続表現の省略に関して、佐久間(1992b:63)は文章・談話の中で2文が連続する形態を接続型・省略型・連鎖型の3種類の連文の型に分け、省略型は「前後の文脈から適当な接続表現を想定して、補うことによって接続型に準ずる文の接続関係の分類が可能になる」と指摘している。佐久間(1992b)の調査は全般的に市川(1978)とほぼ一致した結果を得られている。佐久間(1992b)は、市川(1978:77)で示している「多数の被調査者の見解を総合すれば、かなり客観的な傾向をうかがうことができるはずである」という考えに基づき、市川(1978)と自らの調査の両者を総合し、より客観的な接続表現省略のデータを示している。今回は、佐久間(1992b)のこのデータを踏まえて、中国人学習者の調査結果と対照して、中国語学習者と日本語母語話者の共通点と相違点を明らかにする。(データの詳細は本章の表15(本章73頁)と表16(本章75頁)の日本語母語話者部分を参照されたい)。

以上、本章と深い関係を持つ市川(1987)、佐久間(1992b)の両研究について簡単に述べた。他に、接続表現の省略問題が取り上げられたものに伊藤・阿部(1991)、馬場(2006)などの研究もある。伊藤・阿部(1991)は「接続表現の機能と必要性」を明らかにするため、認知心理学的見地から実験的手法に基づく分析と考察を行っている。結果としては市川(1978)と同じ結果が示されているが、ここは詳細を割愛する。

### 5.3 調査概要

市川(1978)、佐久間(1992b)の調査で明らかにされている日本語母語話者のデータと比較するため、本章は市川(1978)、佐久間(1992b)の両調査で使われた【A・B二種】の調査問題をそのまま利用することにする。日本語学習者に対する調査は予備調査と本調査に分けて行った。予備調査は2011年5月30日に新



瀧大学の中国人留学生 10 人を対象に実施した。予備調査を通して、25 分の適当な【調査 A・B】の回答所要時間が計算でき、また難しい日本語表現の影響で、調査対象者の文脈理解に支障がないかどうかを確認し、特に難しい単語には注釈を加えた。本調査は 2011 年 6 月 20 日中国黒竜江大学日本語学部 3 年生の 69 人を対象に実施した。調査対象は全員 3 年間日本語を専攻し、中級レベルの日本語学習者である。回答時間は 25 分に設定し、調査開始前に「文脈を良く理解した上で、文の続き方が分からなくなる限度内で、各問にある接続表現を省略してもよいか否かを判断してください」と調査対象者に伝えた。

## 5. 4 調査結果

本節では集計によって明らかにされた中国人日本語学習者に対する調査結果について述べる。調査は A・B 二種があるため、まずそれぞれ【調査 A】と【調査 B】に分けて結果を見て行く。その次に、調査結果を踏まえて、佐久間(1992b)における日本語母語話者のデータとの相違点と共通点を検討する。

### 5. 3. 1 【調査 A】

【調査 A】は、2 文からなる各種の文脈モデル 23 例について、それぞれ接続表現を省略しうるか否かを指摘させたものである。その調査結果は表 15 の通りである。調査の結果を細かく記述するため、表 15 は佐久間(1992b)で示されている日本語母語話者(佐久間 1992b によって示されている市川 1978 と佐久間 1992b を総合した結果)と中国人日本語学習者(筆者の調査)の調査結果を接続表現の接続型別に分け、個々の接続類型における具体的接続表現を記した。

表 15. 【調査 A】 連文における接続の省略

番号	接続 型別	接続表現	母語話者(佐久間 1992)			学習者		
			人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率	人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略率
9	順接	そのため	30	<u>22%</u>	48%	21	<u>30%</u>	51%
10		すると	80	58%		40	58%	
11		かくて	89	64%		38	55%	
12	逆接	しかし※	13	9%	<u>11%</u>	22	32%	<u>29%</u>
13		それなのに	25	<u>18%</u>	▲	27	39%	▲
14		ところが	7	5%		12	<u>17%</u>	
4	添加	そして	87	63%	61%	55	80%	65%
5		また	135	97%		53	77%	
6		つぎに	86	62%		41	59%	
7		そのうえ	22	<u>16%</u>		30	<u>43%</u>	
16	対比	まして	108	78%	70%	47	68%	63%
17		いっぽう	136	98%		56	81%	
18		そのかわり	21	<u>15%</u>		41	59%	
19		それとも	122	88%		31	<u>45%</u>	
1	転換	ところで※	69	50%	31%	19	28%	25%
2		さて	51	37%		18	26%	
3		ともあれ	9	<u>6%</u>		15	22%	
20	同列	すなわち	120	86%	66%	51	74%	65%
21		通りわけ	59	<u>42%</u>		43	62%	
22		ようするに	96	69%		40	<u>58%</u>	
8	補足	なお	124	<u>89%</u>	60%	48	70%	50%
15		ただし	61	44%		20	<u>29%</u>	
23		なぜなら	65	47%		▲	36	

まず、接続型別に今回の調査結果を見てみよう。これまで接続表現の類型に関する提案は少なくない。そのうち、市川(1978)は文と文の前後の意味関係によって接続表現を「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「転換型」「同列型」「補足型」などの7種類<sup>29</sup>に類別している。今回は市川(1978)のA・B二種類の調査を利用したため、市川(1978)の接続表現に関する類型方法に従うことにする。

【調査 A】において各接続型の平均省略率は(以降平均省略率と称する)、日本語母語話者と中国人日本語学習者ともに、「逆接型」(日本語母語話者：11%, 中国人日本語学習者：29%)と「転換型」(日本語母語話者：31%, 中国人日本語学習者：25%)が比較的低く(表 15 の 下線を引いた部分)、日本語母語話者と中国人日本語学習者にとって省略されにくい用法として考えられる。それに対して、平均省略率の高いものは、「対比型」(日本語母語話者：70%, 中国人日本語学習者：63%)、「同列型」(日本語母語話者：66%, 中国人日本語学習者：65%)、「添加型」(日本語母語話者：61%, 中国人日本語学習者：65%)「補足型」(日本語母語話者：60%, 中国人日本語学習者：50%)、「順接型」(日本語母語話者：48%, 中国人日本語学習者：51%)の順となっている。省略されやすい接続表現だと考えられる。このように日本語母語話者と中国人日本語学習者には類似点があるが、次は両者の相違点について述べる。

相違点に関しては、接続型の平均省略率から「逆接型」(日本語母語話者：11%, 中国人日本語学習者：29%)と補足型(日本語母語話者：60%, 中国人日本語学習者：50%)の2つは日本語母語話者と中国人日本語学習者の間における平均省略率の差が10%以上であるため、やや違いが見られている。「逆接型」は中国人日本語学習者の平均省略率が高く、「補足型」は日本語母語話者の平均省略率が高くなっている(▲印の付いた所)。他の5つの接続型は両者の間に大きな違いが見られなかった。

次に、個々の接続表現の省略率を見てみよう。両者の相違点から言えば表 15 のように、日本語母語話者の個々の接続類型の中に、1 例ぐらいつつ、他の接

---

<sup>29</sup> 市川(1978)は「連鎖型」を含め、日本語の文接続関係は8種類と指摘しているが、「連鎖型」は接続表現を使用しないタイプの接続なので、今回の考察から除いた。

続表現と異なる省略率を示すものがある。( 線を付した接続表現)、その大部分はソ系の指示表現を含むものである(そのため、それなのに、そのうえ、そのかわり)。一方、中国人日本語学習者も個々の接続類型の中に、1例ぐらいずつ、他の接続表現と異なる省略率を示しているが(線を付した所)、日本人母語話者の場合のように「大部分がソ系の指示表現を含むもの」ではなかった。

さらに、日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違を明確にするため、表15の日本語母語話者と中国人日本語学習者接続表現の省略率を取り出した。両者の省略率の差について次の表16を参照されたい。表16から分かるように、【調査A】のデータIとIIの各23個の接続表現の内、10%以上差のあるものは18個である。その内20%以上差があるのは8個である。この8個の接続表現の内訳を見ると、半分はソ系の指示表現(▲を付したもの)を含むものである。

表 16. 接続表現別の省略率に関する集計

NO	接続表現	母語話者 <sup>30</sup>	学習者	両者の省略率の差
1	その代わり▲	15%	59%	44
2	それとも▲	88%	45%	43
3	その上▲	16%	43%	27
4	しかし	9%	32%	23
5	ところで	50%	28%	22
6	それなのに▲	18%	39%	21
7	また	97%	77%	20
8	とりわけ	42%	62%	20
9	なお	89%	70%	19
10	一方	98%	81%	17

<sup>30</sup> 母語話者のデータは佐久間(1992b)によるものである。

11	そして	63%	80%	17
12	ともあれ	6%	22%	16
13	ただし	44%	29%	15
14	ところが	5%	17%	12
15	すなわち	86%	74%	12
16	ようするに	69%	58%	11
17	さて	37%	26%	11
18	まして	78%	68%	10
19	かくて	64%	55%	9
20	そのため	22%	30%	8
21	なぜなら	47%	52%	5
22	次に	62%	59%	3
23	すると	58%	58%	0

### 5. 3. 2 【調査 B】

【調査 B】において、日本語母語話者と中国人日本語母語話者の省略率に乖離が見られた。表 17 のように「順接型」（日本語母語話者：37%，中国人日本語学習者：35%）と「補足型」（日本語母語話者：50%，中国人日本語学習者：54%）は両者がほぼ同じ省略率を示しているが、「逆接型」（日本語母語話者：52%，中国人日本語学習者：26%）と「添加型」（日本語母語話者：71%，中国人日本語学習者：61%）、「転換型」（日本語母語話者：59%，中国人日本語学習者：39%）、「同列型」（日本語母語話者：90%，中国人日本語学習者：65%）の 4 つは中国人日本語学習者と日本語母語話者の間に省略率の差が見られた。しかも、この 4 つのタイプのどれも中国人日本語学習者の省略率が日本語母語話者より低い傾向が見られた。

表 17. 【調査 B】 段落における接続表現の省略

番号	接続	接続表現	日本語母語話者 <sup>31</sup>			日本語学習者		
			人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略 率	人数 (人)	省略率 (%)	平均 省略 率
1	順接	こうして	61	49%	37%	28	41%	35%
6		そのため※	12	10%		18	26%	
10		だから	65	52%		26	38%	
3	逆接	しかし	54	43%	52%	23	33%	26%
8		ところが※	75	60%		13	19%	
7	添加	さらに	62	50%	71%	35	51%	61%
11		そうして	115	92%		48	70%	
4	転換	やがて	71	57%	59%	27	39%	39%
5		ところで※	74	60%		26	38%	
9	同列	つまり	112	90%	90%	45	65%	65%
2	補足	もっとも	63	50%	50%	37	62%	54%

日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違を比較するため、表 17 の日本語母語話者と中国人日本語学習者接続表現の省略率を取り出し、両者の省略率の差は次の表 18 の通りである。表 18 から分かるように、11 例の接続表現の内、日本語母語話者と日本語学習者の間に 10 以上の差があるのは 7 例である。全体の 63.6%を占めている。つまり日本語母語話者と日本語学習者の段落における接続表現の省略には差がある。一方、6 番の「そのため」を除いて、日本語母語話者の省略率は全部日本語学習者より高い、つまり段落や文章のようなテクス

<sup>31</sup> 日本語母語話者の数値は佐久間（1992b）によるものである。

トで日本語母語話者は日本語学習者と比べ、多くの接続表現を省略する傾向がある。この結果は第3章で見られた日本語学習者の作文における接続表現の量が日本語母語話者より多く用いられる現象と符合する。

表 18. 段落における接続表現別の省略率における集計

NO	接続表現	母語話者 <sup>32</sup>	学習者	両者の差
1	ところが	60%	19%	41
2	つまり	90%	65%	25
3	そうして	92%	70%	22
4	ところで	60%	38%	22
5	やがて	57%	39%	18
6	そのため	10%▲	26%	16
7	だから	52%	38%	14
8	しかし	43%	33%	10
9	こうして	49%	41%	8
10	もっとも	50%	54%	4
11	さらに	50%	51%	1

このように今回 A、B 二種類の調査の結果を佐久間(1992b)の日本語母語話者に関するデータと対照しながら見てきた。次に、今回の結果に基づき、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の省略について考察しよう。両者のそれぞれの接続表現の省略意識に関する特徴を明らかにする。

### 5. 3 考察

日本語母語話者と中国人日本語学習者は、【調査 A】と【調査 B】における省

<sup>32</sup> 母語話者の数値は佐久間(1992b)によるものである。

省略率の差に相違点が見られた。その差は表 19 を参照されたい。省略率の差の算出法としては、各接続型において【調査 A】の省略率から【調査 B】の省略率を引いて得た数値である。例えば、日本語学習者の場合、順接型の両調査の省略率の差は「【調査 A】51%－【調査 B】36%=15%」である。それに対して、日本語母語話者の場合は、順接型における両調査の省略率の差は「【調査 A】48%－調査 B37%=11」である。数値はマイナスの場合は【調査 B】の省略率が高いということである。また、日本語母語話者と日本語学習者の両調査における差の違いを見るため、合計は接続型の差の数値の絶対値を取って合計した結果である。

表 19. 母語話者と学習者の調査 A, B における省略率の差

対象	調査	順接	逆接	添加	転換	同列	補足	対比	合計
母語話者 <sup>33</sup>	A	48%	11%	60%	31%	66%	60%	70%	
	B	37%	52%	71%	59%	90%	50%	/	
	差	11	-41	-11	-28	-24	10	/	125
学習者	A	51%	29%	65%	25%	65%	50%	63%	
	B	35%	26%	61%	39%	65%	54%	/	
	差	15	3	4	-14	0	-4	/	31

表 19 から分かるように、日本語学習者における【調査 A】と【調査 B】の間の差は 31 であるに対して、日本語母語話者の差は 125 で、日本語学習者を遥かに上回っている。つまり、日本語母語話者にとって、接続表現が省略できるか否かは数文でできた文脈かただ 2 文の連文でできた文脈によって大きく左右されている。

また、表 19 における日本語母語話者と中国人日本語学習者の各接続の省略率

<sup>33</sup> 母語話者のデータは佐久間(1992b)によるものである。



から同じ傾向が見られる。日本語母語話者は、順接型(A : 48% ; B : 37%)と補足型(A : 60% ; B : 50%)を除いて、【調査 B】における省略率は【調査 A】における省略率より高い。つまり、【調査 B】のような数文でできた文脈がある場合、接続表現の省略率が高くなる傾向である。これは、数文でできた大きな文脈においては、文と文の関係が文脈なしに並べられた 2 文の連文でできた小さな文脈よりも把握しやすくなると判断されるため、接続表現の省略率が高くなるのであると考えられる。一方、学習者の場合【調査 A】と【調査 B】の間の差が小さい。転換型(A : 25% ; B : 39%)と補足型(A : 50% ; B : 54%)以外、【調査 B】の省略率は【調査 A】の省略率よりやや低い。接続表現を省略しないことによって、自分の論点をできるだけ分かりやすく表明するための戦略であると考えられる。もう一方、今回の【調査 A、B】に「そのため」「しかし」「ところで」のような共通の項目がある。日本語母語話者は両調査において、「そのため」(22%→10%)のようなソ系指示表現を含む接続表現を別にして、「しかし」(9%→43%)、「ところで」(50%→60%)などは調査 A から調査 B まで省略率が多くなっている。それに対し、中国人日本語学習者の数値はばらついていて特に省略率の上昇が見られなかった。以上の考察から多数の文でできた文章や段落のようなテキスト単位において、日本語母語話者は文と文、並びに全文の文脈をうまく察知することができ、文章の環境により自由自在に接続表現を省いたり用いたりしている。一方、日本語学習者は段落や文章における接続表現の省略率がやや低くなる傾向がある。これは学習者が文章を書くとき、文と文の関係を明示化しようとする意識が強くなるのだと考えられる。本研究の第 3 章の調査で得た日本語学習者の作文の接続表現の多用は、文章を書くとき、接続表現を用いて文と文の関係を明示化するための手段であったと言える。

そして、各連接型内部における日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の省略率の差を比べてみると、表 20 の【調査 A】の集計に示すとおり、ばらつきが見られる。

表 20. 【調査 A】における母語話者と学習者の省略率の差

共通(省略率の差は 10%以下)		すると、次に、なぜなら、そのため、かくて	
相 違	両者省略率の差	学習者の省略率が高い	学習者の省略率が低い
	10%—19%	ところが、ともあれ、そして	まして、さて、ようするに、すなわち、ただし、一方、なお、
	20%—29%	とりわけ、それなのに、しかし、その上	また、ところで
	30%以上	そのかわりに	それとも

一方、【調査 B】については、表 21 に示すように、11 例の接続表現の中で、ただ 3 例(さらに、もつとも、こうして)の省略率の差が 10%以下である。それ以外の接続表現は日本語学習者と日本語母語話者の間に 10%以上の差が付き、しかも「そのため」以外のすべての接続表現において日本語母語話者の省略率は日本語学習者を上回っている。この結果はさらに多数の文でできた文章において、日本語学習者の接続表現の省略率が低くなることを十分に予測させるものである。第 3 章で明らかにした学習者のほうが接続表現を多用する調査結果と一致している。

表 21. 【調査 B】に対して母語話者と学習者の省略率の差

共通(省略率の差は 10%以下)		さらに、もつとも、こうして	
相	日本語母語話者と 中国人日本語学習	中国人日本語学習者の 省略率が低い	中国人日本語学習者の 省略率が高い

違	者の省略率の差		
	10%—19%	しかし、だから、やが て	そのため
	20%—29%	そうして、ところで、 つまり	
	30%以上	ところが	

#### 5. 4 まとめ

本章では中国人日本語学習者の接続表現の省略状況を明らかにするため、市川(1978)の【調査A・B】を利用し、中国人日本語学習者を対象に接続表現の省略状況の調査を実施した。調査で収集したデータの集計により、中国人日本語学習者の二種の【調査A・B】における接続表現の省略状況を明らかにした。

連接型から見れば、【調査A】で中国人日本語学習者は逆接型と転換型の省略率が低く、「補足型」、「順接型」、「対比型」、「添加型」、「同列型」の順で省略率が高くなる。佐久間(1992b)の日本語母語話者を対象にした【調査A】も同様な傾向が見られた。しかし、【調査A】の接続表現別の集計データをあらたに比較すると、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の省略率の差が見られた。その中で差がもっとも大きいのはソ系指示表現を含むものである。順接型・添加型・対比型などにも用いられる接続表現「そのため」「そのうえ」「そのかわり」などは必須的用法ではなく、補助的用法に属するものであり、中国人日本語学習者のデータは普通であるが、日本語母語話者の省略率は極端に低くて、両者の間に大きな差が見られた<sup>34</sup>。

【調査B】の調査結果においては、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな相違点が見られた。【調査A】と異なり、【調査B】は多数の文の連接でできた文章(段落)である。このような文章(段落)における接続表現の省略は日本語母語話者のほうがかなり高い率を示している。それに対し、中国人日本

<sup>34</sup> ソ系の指示表現を含むものについては指示機能の有無を検討する必要がある。

語学習者は「順接型」、「逆接型」、「転換型」の省略率がかなり低いのである。一方、日本語母語話者は「逆接型」の省略率しか低くないという結果になった。この現象に関して本稿は日本語学習者に比して日本語母語話者は段落や文章のようなテキストの文脈をうまく察知することができ、文章の環境に沿って自由自在に接続表現を省いたり用いたりすることができる。一方、中国人日本語学習者は段落や文章において接続表現の省略率が全般的にやや低くなる傾向がある。これは日本語学習者が文章を書くとき、日本語母語話者のような文脈把握の能力が十分でないため、文章の論理性のほうを特に重視して文と文の関係を明示化しようとするからであると考えられる。

## 第6章 中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴と 日本語作文に与える中国語干渉について

### 6.1 はじめに

前章までは日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用状況について調査した。調査によって中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用は日本語母語話者を上回っていることを明らかにした。中国人日本語学習者が接続表現を多用することについて、第3章では3つの要因にまとめた。つまり、①「中国人日本語学習者の特殊な文脈展開による多用」という文脈展開に関する要因、②学習者が接続表現を「使っていけない場合に使うってしまう」という誤用の要因、③接続表現を「省略しても良い場合に省略しない」という省略に関する要因である。

要因①については第4章で日本語母語話者と中国人学習者の文脈展開の様式の共通点と相違点を考察した。要因②は明らかに接続表現の誤用に関するもので、学習者の接続表現の誤用については市川(1998)がすでに詳しく論じている。要因③については、第5章で、接続表現の省略意識に関する母語話者と中国人学習者の相違点を考察した。これまでの各章での検討に加えて、本章では、日本語の現象面だけではなく、主に異なった文化圏で育った中国人日本語学習者(中国語母語話者)と日本語母語話者の間に、文章形成における接続表現の使用特徴に如何なる違いがあるかに焦点をあて、その使用特徴を生み出す要因について検討したいと思う。文章の文脈展開について、市川(1978:88)は「文と文がつながって、文脈が形作られていく。文脈における思考方式を端的に示すものは、文と文をつなぐ接続語句である」と述べている。つまり文章における接続表現は文脈展開を担う重要な言語単位だということである。同じことを文章化する時、異文化に所属する日本語母語話者と日本語学習者は異なる思考方式を取るのではないかと思われる。そうだとすると異なる文脈展開が生じると予測

される。この点について第4章で日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における文脈展開を比較し、*t*検定を使って両者の相違を明らかにした。日本語母語話者と中国人日本語学習者の間には「順接型」「対比型」「転換型」「補足型」などの接続表現の使用に有意差があり、「逆接型」「添加型」「同列型」「連鎖型」の使用についてはほぼ同じで有意差が見られなかった。このような中国人日本語学習者の接続表現の多用や文脈展開の相違などはあくまで日本語の作文を分析したものであり、多用や相違に至る要因については母語干渉の面から検討する必要があると考える。

この問題意識に基づき、本章は国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その中国語訳との対訳データベース ver2 正式公開版」に収録された中国人日本語学習者の中国語作文「关于吸烟」(たばこについてのあなたの意見)43篇を調査対象にする。中国人日本語学習者の作文における接続表現の多用や文脈展開の異なりについて母語干渉の面から検討する。中国語干渉があるか否かを調べるために、まず以上のデータベースに収録された中国語作文の接続表現(連詞)を集計する。中国語作文における接続表現の使用と中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の多用との関係を考察する。さらに第4章で明らかにした中国人日本語学習者と日本語母語話者の文脈展開における相違の要因を、中国人日本語学習者の中国語作文における接続表現の使用実態から探る。

## 6. 2 日本語の接続表現の定義と類型

ひとつの文章は、数多くのひとつひとつの文が集まって成り立っている。文と文の間は、ある種の関係を持たなければならない。接続表現はその関係を明示化する重要な手段である。これはどの言語でも共通する点である。しかし、言語によって文の接続関係及び接続表現の分類法が異なっていることも大いに考えられる。本節は先行研究を踏まえて、日本語の「接続表現」の定義や類型と、中国語の「連詞」の定義や類型を比較し、日本語と中国語の「つなぎ言葉」

における共通点と相違点を明らかにする。そのために、まず、中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴と日本語作文に与える中国語干渉について考察する。

## 6. 2. 1 定義と範囲

日本語の接続表現とは、接続詞、接続助詞とそれに相当する表現を含む、いわゆる「つなぎ言葉」の総称であるが、文章論の領域においては、二文間の意味的な接続関係を示す「文の接続関係」の形態的指標とされてきた(佐久間 1992a:63 参照)。先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現である。本論では文と文の関係に焦点をあて、文を超えるレベルで働くもののみを対象にするため、接続助詞を除外して考える。

## 6. 2. 2 類型

文と文の意味関係を基準に接続表現を類型化する研究には、市川 (1978)、永野(1986)、佐久間 (1992a) などがある。ここでは市川 (1978) の類型を取り上げる。表 22 を参照されたい。(この表は第 3 章、24 頁にも同じものを載せてあるが、便宜上再掲する)

表 22. 市川(1978)の文の接続型の 8 類型

順接型	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型 だから・ですから・それで・すると・かくて・こうして・それには など
逆接型	前文の内容に反する内容を後文に述べる型 しかし・けれども・だが・でも・が・ところが・それが など
添加型	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型

	そして・ついで・それから・そのうえ・そのとき・そこへ など
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型 いっぽう・逆に・それとも・または・あるいは など
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型 ところで、さて、では、ともあれ、それはそうと など
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型 すなわち・つまり・要するに・せめて・とりわけ など
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に重ねて述べる型 なぜなら・というのは・だって・なお・ちなみに など
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型(通例接続表現は用いられない)

### 6. 3 連詞の定義・類型

中国語の「つなぎ言葉」は「連詞」あるいは「接続詞」と名付けられることが多く、本研究は「連詞」という名称を使う。「連詞」の類型を論じる前に、「連詞」の定義と範囲を明確にしておく。

#### 6. 3. 1 定義と範囲

中国語において、文と文を接続するつなぎ言葉は呂(2005)で“接続詞”、張(2000)で“連詞”と名づけられている。張(2000:142)は“汉语的连词是一种具有多层次链接功能的虚词，既可以连接词和短语，也可以连接小句和句组”(中国語の「連詞」は多次元的接続機能を持つ機能語であり、語と語、節と節、文と文などを接続することができる)と指摘している。本研究は文の単位を超え、テキストや文章のレベルにおける接続表現の使用を中心に考察するものであるため、中国語の連詞の内、文と文を接続するもののみを考察対象としたいと考え



ている。

また日本語の接続詞と同じように、中国語の連詞は他の品詞からきたものが数多くある（張 2000）。これらのつなぎ言葉は副詞、介詞<sup>35</sup>などの品詞との境界線が曖昧であるため、張(2000)の「連詞」に関する定義に基づき、「連詞」であるか否かを判定する際に、接続する機能の有無を重要な要因として考える。さらに語と語の接続か、節と節の接続か、文と文の接続かなどの内、いずれかを見極める必要がある。より正確に「連詞」を定義するために、呂(1980)や『新華漢語辞典』を参考にした。

### 6. 3. 2 類型

中国語では、連詞の類型について、語、節、文のどのレベルで使われているかによって分類する先行研究が多いが、ここでは文の接続の意味関係に基づいて分類する張（2000）の類型を取り上げる。次の表 23 を見てみよう。表 23 は張(2000 : 189-190)によるものである。「( )」は筆者によるものであり、中国語と日本語の文の関係を区別するため直訳した。

表 23. 中国語の文間の接続型 9 類型

关系 (関係)		连词 (連詞)	
		单用 (単独で使用)	合用 (ペアーで使用)
联合 (連合)	并列 (並列)	同时 (同時に)・另一方面 (一方)	一方面…… (另) 一方面 (一方)・是……不是 (一方) 不是……而是
	连贯 (連貫)	于是 (すると) 接着 (こうして)	接着……然后 (こうして)
	递进 (遞進)	而且/不仅 (そのうえ) 再说 (そして) 再则 (そして)	不但……而且 (それだけではなく) 不但……甚至

<sup>35</sup> 中国語で、名詞の前に付き、動詞との関係を示す前置詞。

			/甚而至于(それだけではなく)
	选择(選択)	或者(あるいは) 还是(それとも)	或者……或者(それとも) 是……还是(それとも)
偏正 (偏正)	因果(因果)	所以(ですから) 因为(ですから) 因而(そこで)	因为……所以(ですから)
	转折(転折)	但(しかし) 但是(しかし)	虽然……但是(しかし)
	假设(仮説)	如果(もし) 倘使(もし)	如果……那么(もし)
	条件(条件)	只要(…ば) 无论(いくら…でも…)	只要……就(…ば) 只有……才(…さえ…ば)
	目的(目的)	为的是(…のため) 为了(…のため)	無

(張 2000 : 189-190)

表 23 のように中国語において、文の接続関係はまず大きく“联合”（連合）、“偏正”（偏正）の 2 つに分けられている。“联合”（連合）はまた“并列”（並列）、“连贯”（連貫）、“递进”（遞進）、“选择”（選択）の 4 つに分けられ、“偏正”（偏正）はまた“因果”（因果）、“转折”（転折）、“假设”（仮説）、“条件”（条件）、“目的”（目的）の 5 つに分けられ、全部で 9 つの類型である。次はそれぞれの例<sup>36</sup>である。

(35) 我们必须保持清醒头脑，作好克服更大困难的准备。同时应该看到，

<sup>36</sup>例文の出典：中国語版の『毛泽东选集第四卷』『人啊人』『顺应自然的生存哲学』『金光大道』『人大大报告 99』『关于女人』『活动变人形』『青春之歌』『心』『中日対訳コーパス』（中日対訳語料庫）北京日本学研究中心、日本語版の『毛沢東選集四』、『ああ、人間よ』、『心の危機管理術』『輝ける道』『全人代報告 99』『女の人について』『応報』『青春の歌』『こころ』：『中日対訳コーパス』（中日対訳語料庫）北京日本学研究中心。

有利条件也很多。 (出典：人大大報告 99) [並列]  
(われわれは冷静な頭脳を保ち、より大きな困難の克服に備えなければ  
ならない。同時に有利な条件がたくさんあることをも見て取るべきであ  
る。) (出典：全人代報告 99)

(36) 他听过不少穷孩子不能读书的故事，他深深地为这些穷孩子而悲伤。  
于是他觉得自己上学实在是无比的福气。 (出典：応報) [連貫]  
(貧乏で学校に上れない子の話をいろいろ聞くと、とても可哀想になる。  
だから自分が学校に上れるのをとても幸せに思う。) (出典：応報)

(37) 李芝庭没有言声。道静也没有答话。可是她心里承认了这个陌生青年  
说的对。并且对这个人——奇怪的、不知哪一点和一般人不一样的人感  
到了尊敬。 (出典：青春之歌) [通進]  
(李芝庭は黙っていた。道静もなにもいわなかった。しかし、胸の中で  
は、この初対面の青年のことばは、正しいと思った。しかも、この人  
物——この不思議な、どこかふつうとは違うこの人物に対して、尊敬の  
念を抱きはじめていた。) (出典：青春の歌)

(38) 看电视时，我和妻把壁橱中的被褥拿出来，迭得高高的，权当简易沙  
发。或者干脆搬两把椅子。 (出典：中日飞鸿) [選択]  
(テレビを見るとき、私と妻は押入れの中から布団を出してきて、間に  
合わせのソファー代わりにする。あるいは、椅子を二つ運んでくる。) (出典：日中飛鴻)

(39) 对于女人的兴趣，也像我似的，适可而止，很少作进一步的打算。所  
以直到他大学毕业，出了国，又回来在工厂里做事，还没有一个情人。  
(出典：关于女人) [因果]

(女の人への関心は私と同じだった。一応は付き合うが一步踏みこむつ  
もりはない。それで大学を卒業して留学し、帰国して工場に勤めるよ  
うになっても、恋人がいなかったのだ。) (出典：女の人について)

(40) 他服从了组织，比较好地完成了学习任务。但是他并没有心服，只是  
出于对这个领导者的敬畏。 (出典：金光大道) [転折]

- (王友清は組織の決定に従い、学習の任務を割によく果たした。しかし、かれは心の底から従ったのではなかった。ただ、この指導者にたいする畏敬の念からそうしたにすぎなかった。) (出典：輝ける道)
- (41) 他今天该到了。如果昨天动身的话。 (出典：八百词) [仮説]  
 (彼は今日着くはずだ。もし昨日出発したのなら。) (出典：八百詞)
- (42) 你要是真要我去我就去！只要你不后悔。 (出典：人啊人) [条件]  
 (おまえがほんとうに行かせたいのなら、行くぞ！おまえさえ後悔しないならな。) (出典：ああ、人間よ)
- (43) 时至今日，一切空话不必说了，还是做件切实的工作，借以立功自赎为好。免得永远被人们所唾弃。 (出典：毛泽东选集第四卷) [目的]  
 (いまとなつては、空言はいっさい無用で、それよりも、手柄をたてて自分の罪をつぐなうために実質的な仕事をしたほうがよい。そうすれば、人民から永久に唾棄されるようなことがなくてすむ。) <sup>37</sup>  
 (出典：毛沢東選集四)

## 6. 4 中国語作文における「連詞」の調査結果と考察

### 6. 4. 1 結果

今回の調査対象になる中国語の作文は43篇である。この43篇の作文は合計590文からなっている。590文の間に合計196個の「連詞」が使用されている。「連詞」の使用率は33.2%である。第3章の日本語母語話者の日本語作文の接続表現の24.6%の使用率を上回っていることが分かった。中国語作文における「連詞」の類別の使用率は表24のようである。表24から分かるように中国語の作文で

<sup>37</sup> (43)の日本語訳は意識であり、中国語の「免得」は「～しないように」の意味である。(43)を直訳すると「いまとなつては、空言はいっさい無用で、それよりも、手柄をたてて自分の罪をつぐなうために実質的な仕事をしたほうがよい。人民から永久に唾棄されないように。」となる。

は、もっとも多く使われる「連詞」は順接の接続関係を表す因果型の「連詞」である。その次は「並列」(8.47%)である。「連貫」「選択」の「連詞」は見つからなかったため、使用率はゼロになっている。

表 24. 「連詞」の使用率の内訳(「連詞の種類別順」)

類型	因果	並列	転折	递進	条件	目的	仮設	選択	連貫	総使用率
使用数	54	50	45	25	18	3	1	0	0	196/590
使用率(%)	9.15	8.47	7.62	4.23	3.05	0.51	0.16	0	0	33.2%

#### 6. 4. 2 考察

第3章においては、中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用率が28.4%、それに対し日本語母語話者の使用率は24.6%だったことを示した。さらに中国人日本語学習者の接続表現の多用の要因に関して、学習者は日本語母語話者と異なる文脈展開を示すことを見た。またこのような異なる文脈展開を形成する原因は中国語の文脈展開による干渉だろうという予測を立てた。今回の表24から分かるように590文からなる中国人母語話者の中国語作文で196個(33.2%)の「連詞」が使われている。日本語母語話者の接続表現の使用率24.6%と比べ、9%多い。この統計データから中国人日本語学習者の日本語作文が日本語母語話者の日本語作文より接続表現が多いという事実は、中国語で作文を書く際に、多くの「連詞」を使うこととある程度関係があると言って良さそうである。

次に、表24の統計から中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用率(28.4%)は、同じ内容について書かれた中国語の作文における「連詞」の使用率(33.2%)より少ないことが分かる。その理由は、中国語の「連詞」の中の「条件」「目的」「仮設」などの「連詞」は、日本語で表現する際にほとんど複文の中における接続助詞になってしまうからである。そのため、中国人日本語学習者

は日本語の作文を書く時には接続表現の使用数が中国語の作文の時よりも少なくなっただと考えられる。以上の中国語の作文における「連詞」の調査によって、中国語の作文における「連詞」、中国人学習者の日本語作文における接続表現、日本語母語話者の作文における接続表現の3者は、(44)のような関係にまとめることができる。もともと中国語の作文においてつなぎの言葉が多いから、中国人学習者の日本語作文はこの干渉を受け、接続表現が多用されるということが分かる。

(44) 中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」 > 中国人学習者の日本語作文における接続表現 > 日本語母語話者の日本語作文

さらに「連詞」の類別から考えると、「因果」「並行」「転折」の3種が相当多く使われている。「因果」や「転折」は日本語における接続表現の「順接」や「逆接」と非常に類似している。「並行」は部分的に日本語の「添加」と一致している。第3章の中国人日本語学習者の日本語作文に関する調査では「順接」「添加」「逆接」の3種の接続表現が中国人学習者の日本語作文にもっとも多く使われている。このような現象も中国語の文脈展開における「因果」「並行」「転折」の多用による干渉だと考えられる。

以上、中国語作文における「連詞」の全体使用数と類別の使用状況について統計を取り考察を加えた。中国語作文の文脈展開に多くの「連詞」が使われることによる干渉を受け、中国人日本語学習者は日本語で作文を書く際に、日本語母語話者より多くの接続表現を使用しているのである。さらに接続表現の類型から考えると、中国語からの干渉により、「順接」「添加」「逆接」の接続表現が多く使われていると言える。本節は中国語における「連詞」の類型に基づき、中国語の作文における「連詞」に関する分析を行なった。次節では「連詞」を日本語の接続表現の類型基準に基づいて類型化し、中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」、中国人学習者の日本語作文における接続表現、日本語母語話者の作文の接続表現の3者の関係と干渉状況について明らかにしたい。

## 6. 5 日本語接続表現の類型基準による中国語「連詞」の分類

### 6. 5. 1 分類結果

日本語母語話者の日本語作文における接続表現の使用状況と比較するため、以上の「連詞」を市川(1978)の接続表現の類型方法で分類し、日本語母語話者の日本語作文における接続表現と中国人母語話者の中国語作文における「連詞」の使用状況を比較し、その関係を明らかにする。市川(1978)の日本語接続表現の類型法は、接続表現の意味、及び文と文をつなぐ際に形成される文と文の意味関係による類型法である。本稿は中国語の「連詞」を市川(1978)の類型によって分類するため、類型の基準は市川(1978)の分類基準に従いたい。つまり各「連詞」の意味と文と文をつなぐ際に形成される文と文の意味関係に基づき、中国語の「連詞」を分類する。その分類の結果と使用数は表 25 のようである。

表 25. 日本語接続表現類型法による中国語「連詞」の分類と使用数

類型	中国語作文に使われる「連詞」	合計(個)
順接	所以・之所以・因此・因而・因为(だから、ですから)、 由此(すると)、这样一来(そうしたら)	54
逆接	可是・但是・不过(しかし、でも)、而・当然・然而・ 尽管・尽管如此・虽然(といっても、それなのに)	45
添加	首先(まず)、再次・其次(つぎに)、最后(最後に)、不 仅如此・还有・并且(さらに)、况且(しかも)、另外・ 也会・再一个・此外(また)、同时(と同時に)	36
補足	之所以(というのは)・尚且(なお)	25
対比	一种说法(一方)・一方(一方)	9
同列	总而言之・也就是说(すなわち・つまり)、总之(要す	5

	るに)、比如・例如(たとえば)	
転換	ところで・やがて <sup>38</sup>	0
その他	如果・只有・那末(…れば、…と、…なら)	18
	为(…のため)	3
	不管(…をしようと或は…であろうと)	1

表 25 のように、日本語の「順接」に相当する「連詞」がもっとも多くなった。その次は「逆接」と「添加」である。一方、表 25 の「その他」は中国語の場合には倒置の形で文と文の接続を実現するものである。例は次の(45)a、(46)a のようである。日本語に翻訳すると、(45)b、(46)b のような複文になることが多い。

(45)a 我可以帮助你。如果你有困难。

(下線部は「連詞」及びそれに対応する接続助詞のこと)

b もしお困りの点がありましたら、力になってあげましょう。

(筆者の作例・和訳は筆者による)

(46)a 他一直坚持学习外语。不管工作多么忙。

b いくら仕事が忙しくても、彼は外国語の学習をやめたがらない。

(筆者の作例・和訳は筆者による)

本研究は文と文をつなぐ接続表現を研究対象にするため、(45)a と(46)a のような「連詞」は、日本語の接続表現の類型基準による分類で考察する時には除外したいと思う。そのような「連詞」を除くと、中国語作文における接続表現の使用率は 29.5%になる。それは第 3 章の日本語母語話者の日本語作文における接続表現の平均的使用率 24.6%よりやや多い。さらに表 25 のように今回の調査で、「転換」に相当する接続表現は中国人母語話者の作文に見当たらなかったため、使用率がゼロになっている。

<sup>38</sup> 接続助詞と対応



## 6. 5. 2 考察

表 25 の「連詞」は次の表 26 の③「学習者の連詞」のようにまとめている。考察の便をはかるため、①の「日本語母語話者の日本語作文における接続表現」と②の「中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現」(以下①②③の略称にする)と一緒に表 26 に収めている。

表 26. 日本語接続表現の類型法による「連詞」の使用数

対象 類型	①母語話者の日本語作文における接続表現	②学習者の日本語作文における接続表現	③学習者の中国語作文における「連詞」
順接	24(13.6%)	64(28.4%) ▲	54(31%) ▲
逆接	48(27.3%) ▲	48(21.3%)	45(25.9%) ▲
添加	50(28.4%) ▲	62(27.6%) ▲	36(20.7%)
補足	17(9.7%) ▲	3(1.3%)	25(14.4%) ▲
対比	8(4.5%) ▲	8(3.6%) ▲	9(5.1%) ▲
同列	25(14.2%) ▲	37(16.4%) ▲	5(2.87%)
転換	4(2.3%) ▲	3(1.3%) ▲	0▲

▲ 同じ傾向が見られるところ

表 26 の数字から主に 2 つのことが分かると考えられる。まず、①と③は母語話者が母国語で(①日本語の作文、②中国語の作文)作文を書く統計データであり、同じく母国語で書く際に類似的傾向が現れていると言える。そして②は日本語学習者の日本語作文における接続表現で、第二言語で作文を書く際の接続表現であるため、②と③の間に母国語の干渉による差が現れている。次に、以上の母国語で作文を書く時の類似点と第二言語で作文を書く時の母国語の干渉について接続表現別に見てみよう。「順接」は②と③の使用率が非常に近く、逆

に①と大きな差が見られている。この点から中国人日本語学習者は中国語ならびに日本語で作文を書く際に原因から結果までの順接の文と文の接続型を好むことが分かった。これは中国語の文脈展開から日本語への干渉だと考えられる。これに対して日本語母語話者のほうは同じ傾向を示していない。

「逆接」は①②③の間に大きな差が見られなかったが、①と③は母国語で作文を書く時の文接続の表現の使用であり、両者はあまり差がない数値を示している。逆に②は①と③より少し少ないことが分かる。「逆接」の使用の効果に関して、浜田(1995)は「自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えたりして、議論を精緻に行い、自分の意見をより強くしている」と述べている。つまり「逆接」の使用は文章の論理展開の上で非常に重要である。以上のような現象から、学習者が「日本語の習得がまだ不十分で、語句や文型などの使用の不自由さがあり、うまく逆の立場から論点を精緻化できないため、「逆接」の使用が少なかったのだろうと判断できる。

「添加」については、①の日本語母語話者と②の学習者の間に差はなかったが、それに対して中国語母語話者の③は少し低い数値である。第3章では、日本語母語話者の作文における接続表現を統計し、日本語母語話者がもっとも多く使っているのが、「添加」の接続表現であることを明らかにした。「添加」の多用によって日本語母語話者はある論点に関して多くの証拠を並べ、論点を補強する傾向があると言えるだろう。一方②の学習者の日本語作文でも「添加」の接続表現が多く使われているが、①とは質的な違いがある。つまり②の日本語学習者は日本語がまだ十分上達していないため、ある論点に焦点を当てて深く論じることができていないのである、一所懸命読者に自分の作文の意見の正しさを示そうとして、たくさんの証拠を累加しているわけである。このことは表26の学習者の「補足」の接続表現における使用状況を見れば、さらによく分かると思う。ある論点に集中して深く論じないため、学習者の「補足」の接続表現の使用は非常に少ない。一方、日本語学習者は中国語で文章を書く際には、「補足」の接続表現が①の日本語母語話者とあまり変わらなかった。つまり、学習者は「補足」

の接続表現を使わないのではなく、日本語習得が不十分であるため、論点を深く掘り下げることができないという理由から、「補足」の使用率が低くなっているのである。

「対比」について①②③は同じ傾向を示している。「同列」の接続表現については②の学習者と①の母語話者とが同じ傾向を示している。日本語母語話者は「つまり」「たとえば」などの論点に対する補足表現を使う傾向がある。学習者が「同列」の接続表現を多用するのは、やはり日本語の習得が不十分な状態で、うまく説明できるかどうか心配があるため、何回も「同列」の接続表現を繰り返して使い、論点の補強作業をしていることの結果だと考えられる。「転換」は、母語話者と学習者の間に大きな相違が見られなかった。

以上、日本語の接続表現の類型基準によって、中国語の「連詞」を分類し、比較してきた。一般に日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に文接続の語句の使用差を生み出す要因は母国語の干渉だと思われるかもしれないが、今回の考察で、学習者が中国語つまり母国語で作文を書く際には、日本語母語話者の日本語作文と類似点がかかなりあったため、母国語の干渉だけではなく、第二言語学習者としての習得不足によって、特殊な文脈展開になることがあるということが明らかになった。

## 6. 6 まとめ

本章では、中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用について母国語(中国語)の干渉があるか否かについて考察した。考察は主に2つの方法で行った。1つは中国人日本語学習者の中国語作文における文と文をつなぐ言葉「連詞」の使用から日本語作文に対する干渉があるか否か、もう1つは、「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の日本語作文、中国人学習者の日本語作文、中国人日本語学習者の中国語作文の三者の文接続表現の使用を考察するというものであった。

結論として、中国人日本語学習者の作文における「連詞」の使用率 33.2%は、

日本語母語話者の接続表現の使用率 24.8%より高く、中国人日本語学習者の日本語作文に見られる接続表現の多用はこの影響からと言えるだろう。そして、中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」の使用率が同じ学習者の日本語作文の接続表現の使用率(28.4%)より高い現象は、「連詞」の「条件」「目的」「仮設」などが日本語の接続助詞に対応しているため、これらの「連詞」を使おうとしても日本語の接続助詞に変身してしまう(接続助詞は本研究の対象外であることに注意)。その結果学習者の日本語作文の接続表現の使用率は母語の作文より少なくなるのである。「連詞」の類型から見ると、「因果」「並行」「転折」の3種が相当多く使われている。「因果」や「転折」は日本語の「順接」や「逆接」と非常に類似した意味機能を持つ。第3章の中国人日本語学習者の日本語作文に関する調査では、「順接」「添加」「逆接」の3種の接続表現が中国人学習者の日本語作文にもっとも多く使われている。これも中国語の文脈展開方式の干渉による多用だと考えられる。

さらに、本章は「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の作文における接続表現、中国人日本語作文の接続表現、中国人中国語作文の中の接続表現(「連詞」)の3者の間の関係を考察した。まず3者の使用データから考えると、中国人日本語学習者の日本語作文における「順接」の接続表現が多く、母国語の干渉があるといえる。他の接続型については母国語の干渉はそれほど顕著ではなかった。

一方、日本語母語話者の日本語作文と中国人日本語学習者の中国語作文との接続表現(「連詞」)の使用率に類似する点があることについて、中国人が母語で文章を書く際の特徴だと考えた。つまり第二言語の習得不十分という問題がなく、論点の正しさや補強などは母語話者としての能力の範囲で十分できるため、両者は「逆接」や「補足」の使用率が非常に似ている。それに対し、日本語学習者の日本語作文は日本語の習得の不十分さで、論点の反面や論点の深いところまで補足することはできなかつた。「補足」の接続表現は著しく少なかつた。ところが、学習者は論点の補足は少ないものの、文章の論理性や、論点の掘り下げなどができないという心配などで、「同列」の接続表現を用いて繰り返し説明す

ることが多く見られた。そのため、学習者の「添加」や「同列」の接続表現の使用は日本語で作文を書く時に、著しく多くなったわけである。「対比」と「転換」の接続表現は3者の間に特に異なる傾向が見られなかった。

本章は、日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用上の違いの要因を探るため、中国人日本語学習者の中国語作文を分析し考察し、彼らが日本語で作文を書く時に、中国語の「連詞」の用法の干渉があるか否かを検討した。上述のように中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用は、母語である中国語の干渉をうけるほかに、学習者の日本語の習得の不十分さによって特殊な文脈展開になることもあることを明らかにした。

## 7. 終章

### 7.1 まとめ

本研究は、接続表現に焦点を当て、日本語母語話者が書いた作文と比較し、日本語学習者の文章の接続表現の使用特徴から日本語学習者の分かりにくく、違和感がある文章の論理展開の特徴を明らかにすることを目的とした。第3、4、5、6章は本研究の本論となっている。各章の関係を簡単に述べると、第3章では日本語学習者と中国人中級日本語学習者の作文における接続表現の使用状況を明らかにし、両者の接続表現の使用上の共通点と相違点の要因を探った。第4章は第3章で明らかにした両者の接続表現の使用状況に基づき、両者の作文における文脈展開の異同を考察した。第5章は第3章で明らかにした学習者が接続表現を多用する現象について接続表現省略意識の視点から考察し、学習者の接続表現多用に関する要因を探った。第6章は日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の使用や文脈展開の方式に相違点があることについて、中国語の干渉という視点から考察した。具体的な結論については以下章別に述べる。

第3章は中級中国人日本語学習者(43名)の作文の接続表現の使用特徴について日本語母語話者(44名)と比較しながら調査分析を行った。接続表現の使用数について日本語母語話者の176例(24.6%)に比べ日本語学習者は225例(28.4%)と数が多いことが分かった。添加型(母語話者28.4%：学習者27.8%)と対比型(母語話者4.5%：学習者3.6%)と、転換型(母語話者2.3%：学習者1.3%)の接続表現の使用は、両者ほぼ同じである。逆接型(母語話者27.3%：学習者21.3%)の接続表現は日本語母語話者のほうがやや高く、同列型(母語話者14.2%：学習者16.4%)は学習者のほうがやや高くなっている。差が大きいのは順接型(母語話者13.6%：学習者28.4%)と補足型(母語話者9.7%：学習者1.3%)である。順接型は、学習者のほうが圧倒に多いのに対して、補足型は母語話者のほうが多い。この調査で明らかにした接続表現の使用状況を市川

(1978)の類型法に従って類型化し、類型化した接続表現を種類別に詳しく両者の使用特徴を考察した。選択される接続表現の種類から見れば、学習者は話し言葉向けの接続表現の、「こうして」、「こうすると」などのような指示語を含む接続表現との使用が特徴的である。また、中級学習者にとっては「むしろ」、「ましてや」等が学習できていないため使えない種類の接続表現となっている。学習者による接続表現多用の要因について、文脈展開の様式の特徴から生じる多用、接続表現の誤用による多用、省略しないことによる多用の3つのケースに分析した。接続表現の問題は文の長さや接続助詞の使用などにも関ることが分かった。

第4章は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的文脈展開の特徴を探るため、第3章の両者の作文における接続表現の調査結果に基づき、両者の作文における接続表現の使用率を算出している。日本語母語話者の24.6%と日本語学習者の28.4%の接続表現の使用率を手がかりするだけでは、日本語母語話者と中国人日本語学習者の文脈展開即ち文の接続関係の解明はできないことが確かめられた。日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文の文脈展開の特徴を明らかにするため、両者の作文に対し、「無理なく接続表現を補う」作業を行い、日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における各文の接続型の使用状況を明らかにした。さらに日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における論理的文脈展開を支える文接続の論理性の相違を探るため、各文章における接続型の分布の $t$ 検定を行い、 $t$ 検定を通して日本語母語話者と中国人日本語学習者の順接型・対比型・転換型・補足型の使用率には有意差があり、逆接型・添加型・同列型・連鎖型の使用率には有意差がないことを明らかにした。

今回の調査で明らかにした順接型と補足型の使用頻度における日本語母語話者と中国人日本語学習者の相違は先行研究の田代(2007)でも指摘されているが、新たな発見としても多角的文接続関係によく使われる対比型と転換型において日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に相違があることが分かった。中国人日本語学習者の作文は逆接型より順接型が多いため、主張の制限に関する論

理展開が日本語母語話者ほど多くない。また中国人日本語学習者は転換型を多用する一方で、補足型が少ないため、新話題や分析論点に対する解説や論証が不十分になる傾向も見られた。この現象は、中国人日本語学習者の主張の論理性や説得力が落ちる原因に繋がる可能性があり、中国人日本語学習者の日本語能力の不十分さや中国語の文章構造などの要因に影響を受けたものだと考えられる。この問題の解明は使用率などの量的な分析だけではなく、中国人日本語学習者の作文の質的分析が必要なのではないかと思っている。これについては今後の研究でさらに検討したいと考えている。

一方日本語母語話者による対比型と補足型の多用から、日本語母語話者の主張展開は主張の正面だけではなく、論点の防衛力を高めるため、反証の面からの論説も少なくないと言える。この場合はとくに対比型がよく用いられる。このような論の展開型は中国人日本語学習者においては少なかった。また日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における文の接続関係の相違に加えて、今回の調査は日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に文の接続関係に共通の傾向があることも明らかにした。この結果は、人間の論理的思考方式というものが文化や言語の隔たりを超え、重なる部分も多いことを証明している。

第5章は中国人日本語学習者の接続表現の省略状況を明らかにするため、市川(1978)の【調査A・B】を利用し、中国人日本語学習者を対象に接続表現の省略状況の調査を実施した。調査で収集したデータの集計により、中国人日本語学習者の二種の【調査A・B】における接続表現の省略状況を明らかにした。接続型から見れば、【調査A】で中国人日本語学習者は逆接型と転換型の省略率が低く、「補足型」、「順接型」、「対比型」、「添加型」、「同列型」の順で省略率が高くなる。佐久間(1992b)の日本語母語話者を対象にした【調査A】にも同様な傾向が見られた。さらに本研究の【調査A】の接続表現別の集計データから考えると、日本語母語話者と中国人日本語学習者の接続表現の省略率の差がもっとも大きいのはソ系指示表現を含むものである。例えば、順接型・添加型・対比型などいわゆる必須的用法ではなく、補助的用法に属する「そのため」「そのうえ」「そのかわり」などは、省略率が極端に低くなるわけではないと考えられるが、



中国人日本語学習者のデータは普通であるが、日本語母語話者のデータは極端に低くなったため、両者の間には大きな差が見られた。【調査 B】の調査結果において、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな相違点が見られた。【調査 A】と異なり、【調査 B】は多数の文の接続でできた文章(段落)である。このような文章(段落)における接続表現の省略は日本語母語話者のほうがかなり高い率を示している。それに対し、中国人日本語学習者は「順接型」、「逆接型」、「転換型」の省略率がかなり低くなっている。一方、日本語母語話者は「逆接型」の省略だけが低い率を示している。この現象に関して本稿は日本語学習者より日本語母語話者は段落や文章のようなテキストの文脈をうまく察知することができ、文章の環境に沿って自由自在に接続表現を省いたり用いたりすることができるという見方をとっている。一方、中国人日本語学習者は段落や文章において接続表現の省略率がやや低くなる傾向がある。これについては、日本語学習者は文章を書くとき、日本語母語話者のような文脈展開を把握する能力が十分できていないため、文章の論理性のほうを過剰に重視して文と文の関係を明示化しようとするのであるとの結論を出した。

第 6 章は中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用について母国語(中国語)の干渉があるか否かについて考察した。考察は主に二つの方法で行った。一つは中国人日本語学習者の中国語作文における文と文をつなぐ言葉「連詞」の使用から日本語作文に対する干渉があるか否か、もう一つは、「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の日本語作文、中国人日本語学習者の日本語作文、中国人日本語学習者の中国語作文の三者の文連接表現の使用を考察するというものであった。

結論として、中国人日本語学習者の作文における「連詞」の使用率 33.2%は、日本語母語話者の接続表現の使用率 24.8%より高く、中国人日本語学習者の日本語作文の接続表現の多用はこの影響によるものといえるだろう。さらに中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」の使用率が同じ学習者の日本語作文の接続表現の使用率(28.4%)より高い現象は、「連詞」の「条件」「目的」「仮設」などが日本語の接続助詞に対応しているため、これらの「連詞」を使おうとして

も日本語の接続助詞に変身してしまうことの影響である。その結果、学習者の日本語作文の接続表現の使用率が母語の中国語作文より少なくなるのである。「連詞」の類型から見ると、「因果」「並行」「転折」の3種が相当多く使われている。「因果」や「転折」は日本語の「順接」や「逆接」と極めて類似した意味機能を持つ。中国人日本語学習者の日本語作文に関する調査では、「順接」「添加」「逆接」の3種の接続表現が中国人学習者の日本語作文にもっとも多く使われている。これも中国語の文脈展開方式の影響による多用だと考えられる。

さらに、第6章は「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の作文における接続表現、中国人日本語学習者の日本語作文の接続表現、中国人日本語学習者の中国語作文の3者の間の関係を考察した。まず3者の使用データを観察すると、中国人日本語学習者の日本語作文における「順接」の接続表現が目立って多く、母国語の干渉があるといえる。ただし他の接続型について母国語の干渉はそれほど顕著ではなかった。

一方、日本語母語話者の日本語作文と中国人日本語学習者の中国語作文との接続表現(「連詞」)の使用率に類似する点があることについて、中国人が母語で文章を書く際の特徴だと考えた。つまり第二言語の習得不十分という問題がなく、論点の正しさや補強などは母語話者としての能力の範囲で十分できるため、両者は「逆接」や「補足」の使用率においても非常に似ている。それに対し、日本語学習者の日本語作文は日本語表現の不自由により、論点の反面や論点の深部まで補足することはできなかつた。そのため、「補足」の接続表現は著しく少なかった。一方で、たしかに学習者は論点の「補足」は少ないものの、文章の論理性や、論点の掘り下げをどうにかして確保しようとするために、「同列」の接続表現を用いて繰り返し説明することが多く見られたのだと考えられる。そのため、「添加」や「同列」の接続表現の使用が日本語で作文を書く時に、著しく多くなったわけである。もう一つの興味深い結果として「対比」と「転換」の接続表現は3者の間に特に異なる傾向が見られなかつたことを指摘した。

## 7. 2 残された課題

本研究の論考は研究の出発点に過ぎず、以下の課題について、今後も積極的に取り組んでいかなければならない。

- ① 今回は中級日本語学習者の作文における接続表現を中心に考察を行ったが、上級と中級の間には接続表現の使用にどんな差があるのかについても、今後考察する必要がある。また中上級の日本語学習者の小論文(800 文)ではなく、もっと長いレポートや論文の中での接続表現の使用状況を明らかにする必要がある。
- ② 本研究は日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用特徴を比較している。第三国の日本語学習者が日本語で文章を書く際に中国人日本語学習者と同じ傾向があるかどうかを検討する必要がある。異なる傾向が見られる場合、その相違を生み出す原因を探るべきである。
- ③ 本研究は日本語の接続表現と中国語の連詞を比較し、日本語学習者の接続表現の使用上における中国語干渉を分析した。日本語と中国語はそれぞれ膠着語と孤立語に属し、接続表現と連詞の間には重なる部分もあるし、重ならない部分もある。重なる部分が学習者の接続表現の使用にどのような干渉を与えるか、重ならない部分の接続表現を使用する際に、不自然などが生じるかどうかを一層明らかにする必要がある。
- ④ 中国語の連詞は日本語における接続助詞と接続詞の区別がないため、中国語の連詞、日本語の接続助詞と接続表現の対応関係について研究する価値があると考えている。

## 参考文献

<日本語で出版されたもの>

- 相原林司(1987)「接続語句と文章の展開」『日本語学』6-9 明治書院, pp. 37-45.
- 浅井美恵子(2002)「日本語作文における文の構造の分析—日本語母語話者と中国語母語の上級日本語母語話者の作文比較」『日本語教育』115 日本語教育学会, pp. 51-60.
- 浅井美恵子(2003)「論說的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—」『言葉と文化』4 名古屋大学, pp. 87-97.
- 安藤淑子(2002)「上級レベル作文指導における接続詞の扱いについて—文系論文に用いられる接続詞語彙調査を通して—」『日本語教育』115 日本語教育学会, pp. 81-89.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.
- 池上嘉彦(1982)「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 1』国立国語研究所.
- 石神照雄(1980)「接続詞について」『信州大学教養部紀要』14-1, pp. 1-11.
- 石黒圭(2001)「換言を表す接続語について—『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に」『日本語教育』110 日本語教育学会, pp. 32-41.
- 石黒圭(2005a)「接続詞の二重使用とその表現効果」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』明治書院, pp. 160-169.
- 石黒圭(2005b)「序列を表す接続語と順序性の有無」『日本語教育』125 日本語教育学会, pp. 47-56.
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書.
- 石黒圭(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋留学生センター

- 紀要』12、pp. 73-87.
- 市川孝(1957)「文章の構造」『現代国語学Ⅱ ことばの体系』筑摩書房, pp. 279-306.
- 市川孝(1958)「ことばの使い方—代名詞・副詞・接続詞—」『日本語文法講座5 表現文法』明治書院, pp. 157-176.
- 市川孝(1965)「接続詞的用法をもつ副詞」『国文』24 お茶の水女子大学国語国文学会, pp. 1-7.
- 市川孝(1975)「文章論」『覆刻文化庁国語シリーズX 文章の構成・表現』教育出版, pp. 97-125.
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 市川保子(1988)「接続詞の用法と文脈展開 — 作文指導のための一試案 —」『筑波大学留学センター日本語教育論集』3, pp. 175-185.
- 市川保子(1998)「接続詞と外国人学習者の誤用」『九州大学留学生センター紀要』9, pp. 1-18.
- 伊藤俊一・阿部純一(1991)「接続詞の機能と必要性」『心理学研究』62-5、pp. 316-323.
- 伊藤誓子(2000)「外国人留学生の文章表現の問題点(2) — 連文について —」『日本女子大学紀要 人間社会学部』10、pp. 99-109.
- 井伏鱒二(1956)「『が』『そして』『しかし』 — 文体は人の歩癖に似てる —」『文学界』10-8、文藝春秋新社, pp. 30-32.
- 氏家洋子(1974)「『関係づけ表現』としての『接続語』」『早稲田大学語学教育研究紀要』12、pp. 1-16.
- 江後千香子(2007)「論說的文章を書くために必要な接続詞 — 留学生の作文指導のために —」『日本語論叢』(特別号 岩淵先生退職記念) 早稲田大学, pp. 292-302.
- 遠藤嘉基(1958)「接続詞が使えない」『言語生活』87、pp. 24-25.
- 大河内康憲(1986)「中国語の文と句の接続」『日本語学』5-10 明治書院, pp. 67-75.
- 岡田俊恒(1975)「接続詞の効用」『防衛大学校紀要』30、pp. 297-314.
- 小川輝夫(1975)「接続副詞の機能」『島大国文』4、pp. 30-42.

- 沖裕子(2006)『日本語談話論』和泉書院.
- 柏木成章(2006)「文章における接続詞」『大東文化大学紀要 人文科学』44、pp. 139-149.
- 加藤英司(1984)「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」『日本語教育』53、pp. 139-148.
- 金子泰子(2002)「日本語初級学習者の作文研究 — 文のつなぎ方の分析を通して — 」『信州大学留学生センター紀要』3、pp. 61-81.
- 加留部謹一(1979)「文のつなぎ — 『接続詞』の使用状況 — をさぐる」『福岡教育大学国語国文学会誌』21、pp. 22-29.
- 川端善明(1956)「接続関係と関係接続表現」『国語国文』25-11、pp. 86-99.
- 木戸光子(2001)「作文教育のための留学生と日本人学生の意見文の比較」『日本語教育学会春季大会予稿集』、pp. 97-102.
- 京極興一・松井栄一(1973)「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院、pp. 89-136.
- 倉持益子・鈴木秀明(2007)「日本語学習者における接続詞の習得 — 留学生の接続詞使用状況 — 」『神田外国語大学紀要』19、pp. 1-24.
- 黒岩浩美(1994)「文章の結束性について — 接続関係の分析からみた学習者の問題 — 」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9、pp. 73-87.
- 甲田直美(1996)「接続詞とメタ言語」『日本語学』15-10、pp. 28-34.
- 甲田直美(2000)「接続詞と対話」『国語語彙史の研究 19』和泉書院、pp. 255-272.
- 木暮律子(2002)「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5 第二言語習得研究会、pp. 5-23.
- 小森早江子(1993)「日本語の接続語句の分類とその問題点」『中部大学国際関係学部紀要』10、pp. 115-127.
- 財部仁子(2001)「作文における接続語句のレベル別問題点」『日本語・日本文化研究』11 大阪外国語大学、pp. 129-138.
- 佐伯哲夫(1976)『語順と文法』関西大学出版・広報部、pp. 241-257.
- 佐久間まゆみ(1983)「文の接続 — 現代文の解釈文法と連文論 — 」『日本語

- 学』2-9明治書院, pp. 33-44.
- 佐久間まゆみ(1987)「段落の接続と接続語句」『日本語学』6-9明治書院,  
pp. 46-55.
- 佐久間まゆみ(1990a)「接続表現(1)(2)」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・  
半澤幹一編『文章・談話のしくみ』桜楓社, pp. 12-33.
- 佐久間まゆみ(1990b)「文段認定の一基準(Ⅱ) — 接続表現の統括—」『文藝・  
言語研究 言語篇』17、筑波大学文芸・言語学系, pp. 35-66.
- 佐久間まゆみ(1990c)「ケース 1 接続表現(1)」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉  
戸清樹・半澤幹一編『ケーススタディ 日本語の文章と談話』桜楓社,  
pp. 12-23.
- 佐久間まゆみ(1992a)「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要 文学  
部』41、pp. 9-22.
- 佐久間まゆみ(1992b)「接続表現の省略と用法」『国文』77お茶の水大学,  
pp. 63-74.
- 佐久間まゆみ(1996)「文の文法と文連続の文法—文章の文法への志向—」『日  
本語学』15-9明治書院, pp. 32-40.
- 佐久間まゆみ(2000)「接続 文の「つながり」から文章・談話の「まとまり」  
へ」『別冊国文学』53 学燈社, pp. 152-155.
- 佐久間まゆみ(2002)「3 接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法 4 複文と  
談話』岩波書店, pp. 117-189.
- 佐久間まゆみ・藤村知子(1990)「ケース 2 接続表現(2)」寺村秀夫・佐久間ま  
ゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『ケーススタディ 日本語の文章と談話』桜楓  
社, pp. 24-33.
- 佐治圭三(1970)「接続詞の分類」『月刊文法』2-12 明治書院, pp. 28-39.
- 佐藤恭子(1987)「接続詞の分類について」『名古屋学院大学外国語教育紀要』16、  
pp. 51-58.
- 佐藤正光(1992)「日本語学習者における連文レベルの誤用について」『明治大学

- 教養論集 日本文学』251, pp. 173-187.
- 鮫島重喜(1995)「初・中級学習者の接続詞運用に関する一考察 — 中国人学習者の作文例から」『名古屋学院大学・日本語教育論集』2、pp. 166-184.
- 杉田くに子(1994)「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴 — 文配列課題に現れた話題の展開 — 」『日本語教育』84、日本語教育学会、pp. 14-26.
- 鈴木一彦・林巨樹編(1973)『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院.
- 高橋圭子・伊集院郁子(2006)「疑問文に見られる “Writer/Reader visibility” — 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較 — 」『日本語教育』130 日本語教育学会、pp. 80-89.
- 田代ひとみ(2007)「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、pp. 131-144.
- 立尾保子(1984)「文と文の接続意識の調査」『国語情報』15-5 国語教育科学研究所、pp. 6-10.
- 俵山雄司(2004)「接続詞の指導について — 『指示語を含む複合接続詞』と『談話を構造化する接続詞』 — 」『筑波応用言語学研究』11 筑波大学、pp. 97-110.
- 張麟声(2003)「論説文体の日本語における因果関係を表す接続詞型表現をめぐって— 『その結果』、『そのため』と『したがって』 — 」『日本語教育』117 日本語教育学会、pp. 23-32.
- 塚原鉄雄(1958)「接続詞」『続日本語文法講座 1 文法各論篇』明治書院、pp. 156-174.
- 塚原鉄雄(1969)「接続の論理 — 接続詞と接続助詞 — 」『月刊文法』2-2 明治書院、pp. 68-74.
- 塚原鉄雄(1970)「接続詞 — その機能の特殊性 — 」『月刊文法』2-12 明治書院、pp. 10-18.
- 寺川みち子・榊原早織(2000)「文章表現の発達(1) — 接続表現の分布 — 」『東



- 海学園国語国文』57 東海学園女子短期大学, pp. 35-45.
- 寺川みち子・榊原早織(2000)「文章表現の発達(1) — 接続表現の分布補遺 — 」  
『東海学園国語国文』59 東海学園女子短期大学, pp. 31-40.
- 時枝誠記(1950)『日本文法 口語篇』岩波書店.
- 時枝誠記(1954)『日本文法 文語篇』岩波書店.
- 徳田裕美子(1995)「接続助詞及び接続詞の誤用について」『日本語の研究と教育  
窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版, pp. 409-422.
- 長田久男(1974)「連文の諸相(2) — 接続副詞の連文的職能 — 」『岡山大学教育  
学部研究集録』40、pp. 118-109.
- 長田久男(1983)「国語連文論(三) — 接続副詞・並列副詞の連文的職能 — 」『事  
実と創造』24 教授学研究の会, pp. 32-35.
- 永野賢(1960)「現代文の接続語の機能と解釈」『講座・解釈と文法7 現代文』  
明治書院, pp. 133-160.
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店.
- 永野賢(1986)『文章論と国語教育』朝倉書店.
- 中村明(1973)「接続詞の周辺—同帰に属する語の文法的性格—」『ことばの研究』  
4 国立国語研究所, pp. 79-100.
- 西田直敏(1986)「文の連接について」『日本語学』5-10 明治書院, pp. 57-66.
- 西山欣爾(1959)「接続詞の意義分類」『国語教室』8-5 大修館書店, pp. 12-19.
- 仁田義雄・益岡隆志(編)(2002)『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店.
- 野村眞木夫(2000)『日本語のテキスト — 関係・効果・様相 — 』ひつじ書房.
- 馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現—指示・接続・反復』桜楓社出版.
- 馬場俊臣(2007a)「国語教育における接続詞指導・習得に関する研究文献とその  
概要(追補)」『国語科における機能的アプローチによる文法教育の再構  
築に関する実証的研究』(課題番号 16530611) (平成16年度～平成18年  
度科研費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書)(研究代表者 山室和也)  
pp. 52-68.
- 馬場俊臣(2007b)「日本語教育における接続詞指導・習得に関する研究文献と

- その概要（追補）」『国語科における機能的アプローチによる文法教育の再構築に関する実証的研究』（課題番号16530611）（平成16年度～平成18年度科研費補助金基盤研究（C）(2)研究成果報告書）（研究代表者 山室和也）pp. 69-84.
- 馬場俊臣(2010)『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観』桜楓社出版.
- 橋本四朗(1967)「接続助詞と接続詞」『講座・日本語の文法 3 品詞各論』明治書院, pp. 163-177.
- 橋本進吉(1948)『国語学概論』岩波書店.
- 浜田麻里(1995)「トコロガとシカシ・デモなど — 逆接続詞の談話における機能 — 」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版.
- 浜田麻里(2000)「日本語の接続表現からみた文と文の関係 — アルイハを例として — 」*KLS Proceedings of the Twenty-Fourth Annual Meeting 20* .pp. 294-302.
- 濱田美和(2000)「原因・理由を表す接続表現 — 中上級日本語学習者の誤用例分析を通して — 」『IDUN』14 大阪外国語大学, pp. 203-222.
- 林巨樹(1973)「文章論・文章と品詞」鈴木一彦・林巨樹篇『品詞別日本文法講座 1 品詞総論』明治書院, pp. 133-162.
- 原田朋子(2005)「接続表現から見た文脈展開 — 日本語母語話者と上級日本語学習者の小論文比較 — 」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』5、pp. 103-120.
- ハリデーM. A. K&R. ハッサン著、安籐貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉訳(1997)、『テキストはどのように構成されるか — 言語の結束性』ひつじ書房、原著：Halliday, M. A. K. and R. Hasan(1976) *Cohesion in English*, London and New York:Longman.
- ハリデーM. A. K&R. ハッサン著、笈壽雄訳(1991)『機能文法のすすめ』大修館、

- 原著：Halliday, M. A. K. and R. Hasan (1985) *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*, Deakin University.
- ハリデー, M. A. K. 著、山口登・笈壽雄訳(2001)『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』くろしお出版、原著：Halliday, M. A. K. (1994), *An Introduction to Functional Grammar*, London: Edward Arnold.
- 範海翔(2010a)「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における接続表現に関する比較研究」『言語の普遍性と個別性』1 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 87-105.
- 範海翔(2010b)「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における論理的文脈展開に関する比較研究」『現代社会文化研究』47 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 251-265.
- 範海翔(2010c)「日本語母語話者と中国人日本語学習者における接続表現の省略に関する対照研究」『現代社会文化研究』49 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 17-30.
- 範海翔(2011)「中国語母国語話者の中国作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える干渉」『現代社会文化研究』51 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 1-13.
- 範海翔(2012)「日本語の接続表現と中国語の連詞の類型に関する比較」『言語の普遍性と個別性』3 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 65-73.
- 坂東正子(1997)「日本語学習者の文章における文脈展開」『日本語・日本文化研究』7 大阪外国語大学, pp. 213-224.
- 藤田保幸(1990)「接続語・接続成分」『日本語学』9-10 明治書院, pp. 57-61.
- 堀田要治(1958)「文脈」『続日本文法講座3 文章篇』明治書院, pp. 81-107.
- 堀田要治(1969)「副詞・接続詞は品詞か句か」『月刊文法』1-3 明治書院, pp. 39-44.
- 水山勇(1970)「接続詞の誕生と発達」『月刊文法』2-12 明治書院, pp. 19-27.
- 宮地裕(1983)「二文の順接・逆接」『日本語学』2-12 明治書院, pp. 22-29.
- 三好理英子(2006)「日本語母語話者の意見陳述における談話」『多摩留学生教育研究論集』5 東京学芸大学, pp. 47-52.

- メイナード・泉子・K(1997)『談話分析の可能性』くろしお出版.
- 森岡健二(1973)「文章展開と接続詞・感動詞」鈴木一彦・林巨樹篇『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院, pp. 7-44.
- 森田良行(1958)「文章論と文章法」『国語学』32、pp. 91-105.
- 森田良行(1967)「接続詞の機能」『国文学研究』35、pp. 14-24、早稲田大学.
- 森田良行(1984)『基礎日本語 3 — 意味と使い方』角川書店.
- 森田良行(1993)「現代日本語論への新しい視点 — 接続」『国語学 解釈と教材の研究』38-12 学燈社, pp. 68-73.
- 守屋三千代(2000)「添加型の接続語について」『日本語日本文学』10 創価大学, pp. 45-58.
- 楊暁輝・馬場俊臣(2004)「接続詞『そして、それから、それに、そのうえ』の用法」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学篇』54-2、pp. 27-41.
- 横林宙世・下村満子(1988)『接続の表現』荒竹出版.
- 渡辺亜子(1996)『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版.

<中国語で出版されたもの>

- 呂淑湘(1980)「現代漢語 800 詞」商務印書館.
- 呂淑湘(2005)「語法修辭講話」遼寧教育出版社.
- 新華漢語辭典篇集委員會(2004)『新華漢語辭典』商務印書館.
- 張誼生(2000)『現代漢語虛詞』華東師範大學出版.

**【例文出典】**

中国語版の『毛泽东选集第四卷』『人啊人』『顺应自然的生存哲学』『金光大道』  
『人大大報告 99』『关于女人』『活动变人形』『青春之歌』『心』:『中日対訳コーパス』(中日対訳語料庫) 北京日本学研究中心.

日本語版の『毛沢東選集四』、『ああ、人間よ』、『心の危機管理術』『輝ける道』  
『全人代報告 99』『女の人について』『応報』『青春の歌』『こころ』:『中日対訳コーパス』(中日対訳語料庫) 北京日本学研究中心.

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、数多くの方々にお世話になりました。福田一雄先生(博士前期・後期課程の主旨導教員)は、精神面では、暖かく励ましてくださり、また、研究面では、つねに熱心にご指導くださいました。高田晴夫先生(博士後期課程の副指導教員)はいつも優しく対応してくださり、現代社会文化研究科の『紀要』の投稿論文を丁寧に添削してくださいました。朱継征先生(博士後期課程の副指導教員)は、学位論文に関して貴重なご意見をくださいました。先生方の御指導に対して厚く御礼申し上げます。

文章研究・機能文法といった言語学・国語学の知識の基礎を築いてくださった福田一雄先生(修士課程の主旨導教員)、言語学について幅広く教えていただいた山崎幸雄先生(修士課程の副指導教員)、日本語学の研究法を教えてくださいました三ッ井正孝先生(修士課程の副指導教員)、研究を進めるにあたり御助言を賜った秋孝道先生、新潟大学言語研究会の研究発表の原稿を優しく添削してくださった大竹芳夫先生に対して、深く感謝の意を表したいと思います。また、新潟大学言語研究会の先生方には多大なご指導を賜りまして、心より感謝申し上げます。